

41541

教科書文庫

4
810
41-1919
20000 80462

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

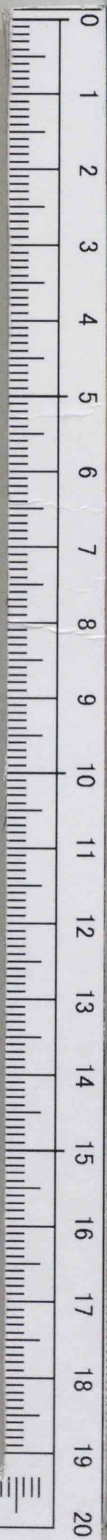
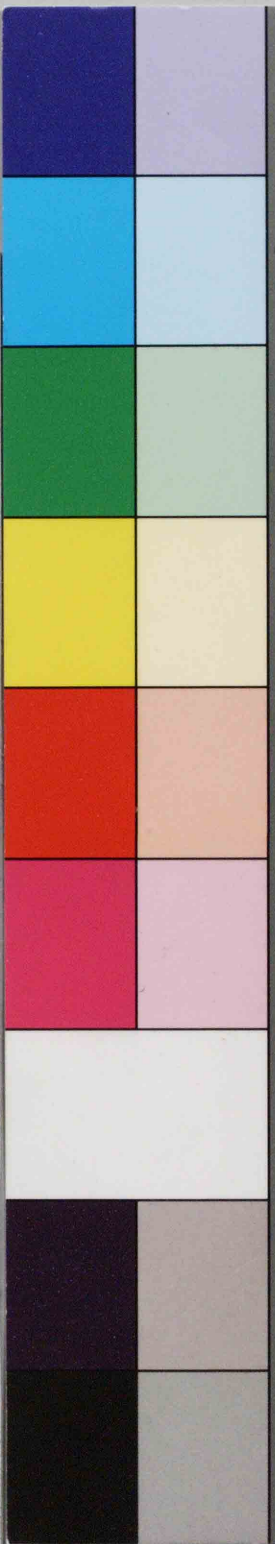
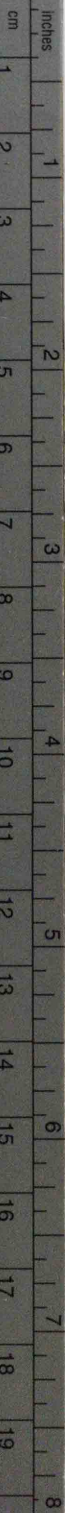


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

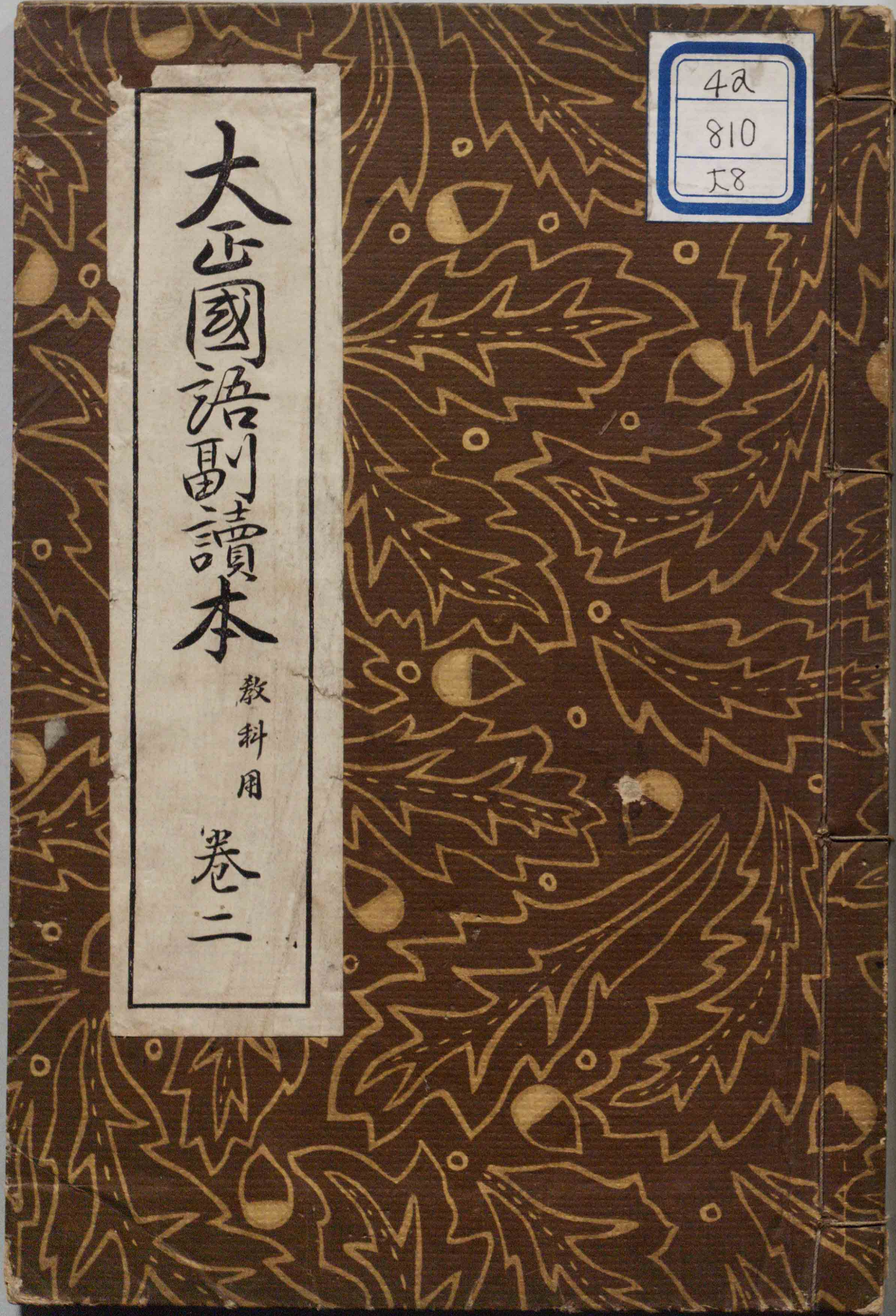


4a
810
58

大正國語副讀本

教科用

卷二



室料資
大正八年八月二十六日
文部省檢定
中學國語教科用

48
810
大8

保科孝一編 教科用

大正國語副讀本

東京 會社教育英書院發兌

大正國語副讀本 (教科用) 卷二

目次

- 一 大日本文化……………一
- 二 初旅……………六
- 三 富士の遠望……………二
- 四 持久的努力……………三
- 五 エムデンとドレスデン……………三〇
- 六 ナイヤガラ瀑布……………三六
- 七 岩崎谷……………四一
- 八 有史以前の歴史……………四六



目次

80485

目次

二

九	車窓の伊吹山	五
一〇	平相國の薨去	六
一一	五箇邑	五
一二	浮花	七〇
一三	衣のたて	七
一四	殿中の双傷	七
一五	螢の王國	八
一六	七株松	その一.....	九
一七	七株松	その二.....	一〇五
一八	筑波まうで	二八
一九	足柄山の秘曲	一三〇

目次

三

二〇	労働の朝	一三六
二一	土の窟	一三八
二二	苦境	一四一

一 大日本文化 一

二 大日本文化の発展 一

三 大日本文化の発展 一

四 大日本文化の発展 一

五 大日本文化の発展 一

六 大日本文化の発展 一

七 大日本文化の発展 一

八 大日本文化の発展 一

九 大日本文化の発展 一

十 大日本文化の発展 一

大正國語副讀本 (教科用) 卷二

山路愛山

名は彌吉、舊幕臣、史學に通じ文章を能くす。(二五二四—二五七七)

文化

一 大日本文化

山路愛山

我々が世界の中心に日本を押し出す場合に、日本は野獸の様な強い國だ」と評價されて、それで満足すべきではない。日本は宜しく日本流の文化を以て、世界に貢獻すべきである。今日でも「文明の敵」と云ふ言葉は、非常な重みを有つて居る。「彼は文明の敵なり」と云はれる時には、何程強い國でも、其の衷心に弱みを感じざるを得ない。第一、國を建てる者の本心に於ても疚しい所がある。故に我々は先づ日本流の文

化を世界に布くと云ふことを、我が國の最大目的としなければならぬ。如何にして日本流の文化を世界に布くべきであるか。我々は傳道師を白人の間に派遣する譯には行かない。我々は歐羅巴人に教へるのに、日本の工藝・科學を以てする譯には行かない。さう云ふ時期は將來或は來るかも知れない、又來る事を希望する。さりながら今日の事ではない。我々は今眼前に爲すべき文明の事業を有つて居るではないか。我々は既に朝鮮人を我々の同胞の中に加へたではないか。我々は既に滿洲人の幾部分を我々の感化の中に入れてしまつたではないか。さう云ふ者に向つて、我々は先づ日本流の文化を布かなければならない。

我々の鄰に支那と云ふ大きな國がある。其の向ふには印度と云ふ一つの世界がある。印度は一國と云ふよりも、寧ろ一世界と云ふべき程のものである。其の印度からは我々に佛敎が來て居る。其の佛敎に連れて、多くの印度思想が我々の文學の中にも制度の中にも入つて居る。支那の法律・制度・文學は曾て我々の師匠であつた。我々は思想に於ては、殆ど支那の一つの州であると云つてもよい位に、支那人の恩惠に預つて居つた。今日に於て我々の爲すべきことは、其の印度の文明、支那の文明、西洋の文明と、日本固有の文明とを混一して、それを消化して大きな日本文化を造つて、其の文化を印度にも支那

にも布いて行くことである。印度學・支那學を日本人のものにして、日本人が世界から得た文明を以て之を解釋し、新しい日本文化を造つて、彼等を導いて行くことである。先覺者が後覺者を導くのは、天の定めた義務と云ふべきものである。英吉利が英吉利文化を誇り、獨逸が獨逸文化を誇つて、各文明の權利を主張する場合に、我々が支那や印度を其の自然のままに放任して置くことと云ふことは、自ら先覺者たる位置に孤負するものではないか。故に我々は今日に於て、新しい大日本文化なるものを現出することに努力する必要が有ると思ふ。若し大日本文化と云ふ言葉を嫌ふ者があつたなら、アジア文化と云つても宜しい。我々は

帝國的氣運

アジア文化を造つて、そしてアジアの覺醒を圖らなければならぬではないか。

此の精神的事業が出来なければ、軍備が十分出来ても、物質的の富が十分増しても、我々は未だ世界の帝國的氣運に對して對抗することは出来ない。唯「日本は強い」と云ふだけのことであつたなら、我々は決して天下後世から感謝せられる理由はなく、我々の仕事が大きくなれる譯もなく、又日本が世界の心と共鳴すべき理由もない。

共鳴

日本は其の亞細亞に於ける先覺者たる位置から、又其の早く白人種の文明を消化し得た位置からアジア文化を造つて、其の人種としては親類同士の國民、若しくは昔から文明

の取遣りをした親しみのある國民を覺醒することは、正に我々の任務ではあるまいか。(世界の過去現在未來)

村上浪六

名は信、ちぬの浦と號す、堺市の人、小説家。

二 初旅 村上浪六

父はなくとも子は育つ。貧に暮せど成長は人に後れず、母が涙の露に潤ひて、枯れもせず凋みもせず、予は既に十六歳身に纏ふものこそ垢染みて、所々に破れを補ひたれど、人知れず心に織りたてし綾錦、やはか何物にも劣るべきかと、一郷の青年を眼下に睨みて嘲笑ひしは、當時の予が意氣なり。従つて自然郷里に師友なき心地せらる。

鳥は空の高きに翼を張り、土は都の廣きに志を伸ぶ。睡れ

る如き片田舎にもはや一日の空しきを堪へ難く、勃々たる氣は既に東京を夢む。されど我が身を顧れば、學資を給せらるべき家にあらず。出てて半日の旅費さへ覺束なきのみか、幼少より一方ならぬ憂きが中に育てられ、不肖ながら子としては外に持ち給はぬ一人の母、しかも多年の疲れにや、此の頃俄に老い給へる姿を見つゝ、争てか遠く遊ばるべき。「眼前の飢渴に迫らるゝよりも、其の子を奉公に出せば、せめて片袖の涙も干ぬべし」と、さまざま人に勧められし時すら、此の身を離し給はざりし母を残して、心の駒の手綱を絞りて幾度か引戻せど、やゝともすれば轡を切り鐙を外した、眞一文字の驀地に乗せて走らん堪へ

難さ。我こゝに在りとも、今は店賣の駄菓子一個に値するものをも産み出さず、日夜に運び給へる針の目の一寸を縫ふだけの助けにもならず、只徒に母の苦勞を重ねて、母の賜物を費すのみと思へば、忍び難き今日を忍びて、孝を他日に盡すべき道あり。

一夜この理を説いて母に乞へば、案外に予が志の健氣なるを喜び給へり。「されど如何にせん貧しければ」とて、只その一事を歎き給へるに、予は思はず飛びたつ心地。「はや既に十六歳。牛にも踏まれず馬にも蹴られず、東海道は人の荷を負ひ人の車を曳いても行くべし。都門に入れば學僕勞働の暇に修養すべし」と誓ひし我が顔を、つくづくと今更涙

に曇れる目に見給ひて、親甲斐のなき母親を持ちし哀れさよ」と勿體なし。此の言葉を聞きし時、予は母の前に兩手をつきしまゝ、暫し頭を擧げ得ざりき。

東上の許を受けし身の嬉しさ。此の嬉しさには、過ぎし幾年の貧苦も一時に忘れ、前途如何なる運命の來るも思はず、只年少客氣の五體ぶるゝと勇み震ひぬ。されど其の日にさへ足らぬ勝の中より、皮肉を削るが如くに蓄へ置かれし七圓の金。「堪忍せよ、此の外に母の力をなし」と泣いて與へられし時、思はず總身は寒く縮みて、生涯またこれほどの苦痛なし。

十月の二十五日、いよゝ出立の朝。昨宵より寢もやらで

一夜を明し給ひ、我が子の首途祝はむと、眞心をこめられし小豆飯に味噌汁、小さけれど魚類の王とせる鯛の焼物。亡父の位牌に線香を立てて、其の前に母は打伏し、「悴は只今これから旅へ行きます。影身にお添ひくだされよ」と泣かれたり。

生れて始めての旅にも、常着のまゝの袷に綿ネルの襯衣、鼠色となりし木綿の兵兒帯だけは、三日前に洗ひて白く、母が手に仕立て給ひし紺の脚絆、背戸の豆賣る老爺が自慢に造りくれし草鞋を履き締め、二枚の布子と數冊の寫本とを肩に振分け、雨をも防げ山坂の杖ともせよ」と、知人が餞別の蝙蝠傘を携へ、近處の人々にも懇ろに母を頼みて出でたちぬ。

態と我が家をば振返らず、殊更足早に二町餘りを行きし頃、そつと後を見れば、母は半町ほどの此方まで送り來りて佇み給へり。數多の子を持ちて富み榮え、落着く處も家も定りて、何不自由なく汽車、汽船の便にて送るさへ悲しきは親の常なるに、是は浮世の憂きが中に抱き合うて、互に泣き來りし親一人子一人の別れなればさもありぬべし。(人生の旅行)

三 富士の遠望

(一) 東海道の富士

昔の五十三次の道中双六や、廣重の繪などに現はれて居る富士の姿は面白い。其の起點の日本橋の背景が、既に其の

田山花袋
名は録彌、群馬縣の人、小説紀行文に巧なり。(一五三二)
廣重
安藤徳兵衛、一立齋と號す

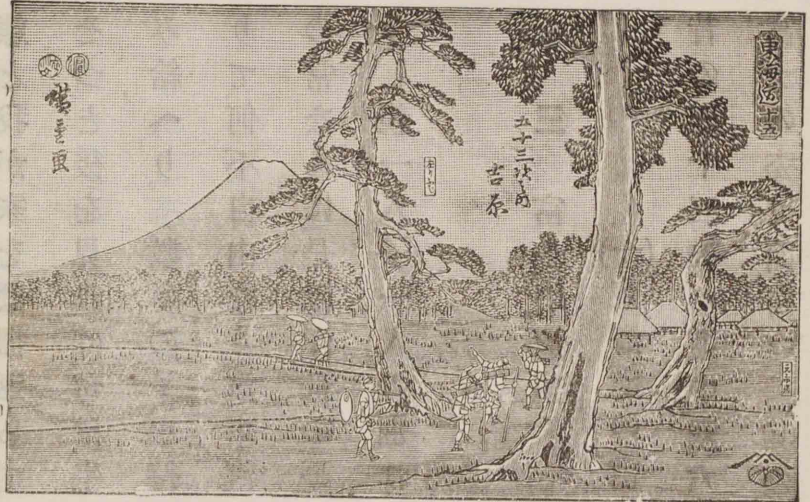
浮世繪師、山水名所をよぐ。(二四五七—二五八)

川崎 神奈川県橋樹郡、多摩川の南岸、人口約五千五百。

六郷川 多摩川の末流川崎附近、往時東海道街路の渡船場。

程が谷 神奈川県橋樹郡。横濱市の西方約半里。

箱根 神奈川県足柄下郡足柄山南邊の大火山、東海道第一の險要。



(一) 廣重の富士

白扇で塗られてある。川崎の手前の六郷の渡あたりにも、相模丘陵を前にして高く聳えて居る。併し富士の姿と旅客の始めて相對してゐるのは、程が谷の先の信濃坂の上の茶屋であつた。當年の旅客は日毎に其の姿の近くなつて行くのを樂みにしつゝ、草鞋脚絆で歩いて行つたのであつた。

三島 静岡県田方郡の都會、人口一萬餘。

沼津 静岡県駿東郡の都會、静岡市の東北約十六里。

薩陞峠 静岡県庵原郡薩陞山上の通路、眺望絶佳。

蜀山人 太田南畝、學者狂歌師、幕府の臣。(二四〇九—二四八三)

興津 静岡県庵原郡の都會、静岡市の東北四里

蒲原 同縣同郡、静岡市の東北約七里。

箱根山中で見る富士は種々に形がかはつて描かれてある。時には籠と雲助の毛脛とを添景にして書き、時には關所と槍とを前に置いて書き、又は湖水と相映對させて書き、武士と挾箱とを取合せて書いてある。三島から沼津・薩陞の峠からの眺望が最もよく、昔の旅客は皆々笠を傾けたり首を廻らしたりしてそれを仰いだ。蜀山人は其の峠の上で山の神さつた峠の風景は三行半には書けど盡きせじ

などと洒落のめしてゐる。併し興津以西は今までとは反對に、遠く小さくなつて行く富士が描かれてある。實際今通つて見ても蒲原のトンネ

静岡

静岡縣の首
都、安倍川の
東邊、人口約
五萬、舊稱駿
府また府中。

島田

静岡縣志太郡
大井川の左
岸。

富士川

山梨縣笛吹・
釜無・蘆の三
川の合流、蒲
原町の東にて
海に入る。日
本三急流の一。

大井川

甲斐に發し駿
遠の國境を劃
し島田町の西
にて海に入
る、長さ四十
六里。

濱名湖

静岡縣濱名・
引佐兩郡に跨
る、面積五方
里。

潮見阪

同縣濱名郡白
須賀町の東南
なる小さき
阪。

足利義教

三代將軍、義
満の子、赤松
滿祐に殺せら
る。(二〇五四
—二二〇一)

菊川

静岡縣榛原郡
金谷町大字菊
川。

吉野朝の忠臣

藤原俊基を指
す。

業平朝臣

平城天皇の皇
子阿保親王の
第五子、在原
姓、和歌を能
くす。(一四八
五—一五四〇

竹の下

静岡縣駿東郡

ルを向ふに抜けると、もう富士とは縁が遠くなつて行くの
を感じる。

私達の静岡・島田あたりで見た富士はもう餘程小さい。富
士川以西の丘陵に其の半ばは遮られて居る。それでも大
井川の蓮臺渡には、やはり其の背景に富士が畫いてある。
上方から江戸に向つて來る者も、やはり此の富士を眺める
事を樂みにして歩いて來たに相違ない。西から來て最初
に富士を望む地點として著名なのは、是から濱名湖畔に行
かうとする少し手前に在る潮見阪の觀音だが、其處からは
濱名湖の北東部を繞つた丘陵の上に、富士が小さく現はれ
て居るのが見える。足利義教は此處で、

今ぞけふ願ひ滿ちぬる潮見阪

心ひかれし富士をながめて

と云ふ歌を詠んだ。それに關聯して、古來東海道を通つて
行つた歴史上の人達の事蹟が考へられるのも自然の順序
である。菊川の里に歌を留めた吉野朝の忠臣も、例の東下
りの跡を處々に残した業平朝臣も、竹の下の一戦で敗れて
退いた義貞も、信長も信玄も秀吉も家康も、皆この路を通つ
て東海の富士を仰いで、鎌倉乃至小田原へと志して行つた
のである。西行に富士見西行の名あるのも面白い。
長く海中に突出して、内に風光明媚な衣が浦を包んだ渥美
半島では、伊良湖崎の東一里にある越戸の大山の上から、鮮

足柄村の中、御殿場の東約一里。

小田原

神奈川縣足柄下郡の都會、箱根山麓、國府津の西南一里半。

西行

佐藤義清、歌僧、天下を行脚す。(一七七八一—八五〇)

衣が浦

愛知縣知多灣の別名、鳴海より五六里。

渥美半島

三河國の東南隅より西南に斗出す。

伊良湖崎

愛知縣渥美半島西端の海角。

越戸

愛知縣賀茂郡

かに富士の姿が眺められる。それは丁度海を越した志摩の日和山から眺めた形と同じであるが、さうした絶海の畔に、思ひも掛けず其の端麗な姿を髣髴し得たのは、何とも言はれず懐かしい。

古來幾多の英雄、幾多の佳人が、或は愁ひ或は歎き、或は楽しみ或は喜びながら、此の富士を眺めて通つて行つたのを思ふと、私は「時」と「歴史」とを前にして、屹然として高く雲表に聳えて居る山の姿に憧れずには居られない。夥しい變遷だ、今は飛行機が其の半腹の空を凄しく鳴つて掠めて行く。

(二) 武藏野の富士

武藏野の背景はやはり富士で塗られて居る。繪にもさう

上郷村越戸。

日和山

三重縣鳥羽町の北西に屹立する一丘、高さ七八十間、眼界極めて廣し。

ニコライの高塔

東京市神田區駿河臺。

十二階

東京市淺草區淺草公園。

平河天神

東京市麴町區平河町。

日比谷

東京市麴町區白金臺。

世田が谷

東京府在原郡半藏門宮城の西門。麴町區。

した種類のもものが澤山にある。尾花が末に描かれた富士、落武者の添景として描かれた富士、近頃になつては、ニコライの高塔や瓦斯タンクや十二階などが、其の前景として役立つ。それにつけても昔の武藏野の様が思出される。皇居の丘陵に平河天神があつて、日比谷の岸に波が打寄せ、白金臺に沿つて淋しい漁村が連つて横たはつてゐた時分の様子が、又は世田が谷から來た往昔の奥羽街道が、麴町を通つて半藏門をぬけて、ずつと海岸へと出て行つてゐた頃の事が、乃至は更科日記にある竹芝の浦時分の淋しい光景が、其の時分にも、旅客はやはり荒涼たる武藏野の末に、白く雪に輝いた富士を仰いで旅をして行つたのである。

更科日記
旅行日記、菅原孝標女著。

Motor-boat
モーターボート
自動艇。
Asphalt
ト
土瀝青。
駿河臺
東京市神田區
駿河町
東京市日本橋區
富士見町
東京市麴町區

富士は今でも東京の帝王である。東京の何處からも富士を取去ることは出来ない。街頭の富士の晴雪は、一日の忙しい勤に疲れた都會の人達の頭に、新しい自由と慰藉とを與へる許りではない。富士は實際そこから此處からも見える。煤煙の暗く渦を巻いてゐる中からも、だらりと藪に向つて下つて行く阪の半腹からも、若い人達が浴衣姿で涼んでゐる夕暮の屋敷町からも、モーターボートの往來する川沿の高樓の欄干からも、又は電車の輕快に走るアスファルトを敷いた街路からも、「あ、富士が！」斯う言つて都會の人達は、あくがれる様にして到る處からそれを眺める。駿河臺、駿河町、富士見町、さうした名稱は總べて昔の人達が、

及び麻布區に在り。

太田道灌
名は持資、上杉定正の臣、江戸城を築く兵法に通じ、和歌を能くす(二〇九二―二一四六)
靜勝軒
道灌の居館、江戸城内。

やはり此の富士にあくがれた態を示してゐる。徳川家康が初めて此處に覇府を開いた時などには、殊に此の富士の晴雪が英雄の心に浸み渡つて感ぜられたに相違ない。太田道灌は之を靜勝軒の軒に仰いだ。山はみな夜になり行く大空に富士が嶺のみぞ暮れのこりける



蕨驛 埼玉縣北足立郡 浦和の南一里。

足柄山

神奈川縣足柄上郡、駿河國境に起伏し、南東箱根に連る。

丹澤山

神奈川縣愛甲郡、海拔五一〇尺。

多摩山群

東京府三多摩地方の山群。

秩父山

埼玉縣秩父郡 諸山の總稱、十數峰あり、海拔各一五〇尺以上。

稻毛

千葉縣千葉郡 検見川町の一隅、千葉より二里、東京よ

或年の冬、私は信越線の蕨驛附近で斯う詠んだが、關東平野の處々から見る富士もまた美しい。東京の郊外では大抵足柄箱根を前景にして居るが、是が西北に進むに従つて、丹澤山塊から多摩山群次第に秩父山塊を其の前に帯びる様になつて行く。中川の河口から見た富士は、東京の百萬甍を帯びた形に於て優れ、稻毛の海岸から見た富士は、盤のやうな海と無数の白帆とを持つた形に於て優れて居る。多摩の横山の上では形は小さいが、前に清淺晶玉の一水を帯にし、附近往昔の武藏野の名残の林や草原を持つて居るのが好い。武藏野の跡を、今の東上武藏野兩線の駛走する附近に探る人達は、思ひも掛けず、其の紫紺色に染つた美しい

多摩の横山

東京府南多摩郡、多摩川の南岸なる丘陵、八王子市附近海拔六〇〇尺以下。

東上鐵道

東京市外山の手線池袋驛より攻戸驛に至る。

武藏野鐵道

同驛より飯能驛に至る。

燕村

姓は谷口また與謝、大阪天王寺の人。天明の頃新俳風を興す。(二三二六―二四四三)

建部遜吾

文學博士、東京帝國大學教授。門司

夕暮の富士を、林の外又は田舎の垣の縁、又は蚊遣火に包まれた一村の上に發見するであらう、黄熟した麥の畑または甘藷の畑、林に沿つた草原路の上に、遙にそれを發見して、思はず驚喜の聲を發するであらう。秋は郊外に於て野趣に富んでゐる。「山は暮れて野は黄昏の薄かな」。斯ういふ燕村の句があるが、其の黄昏の薄の上に、富士は其の落日に彩られた姿を、さながら繪の様に現はして居る。(山水小記)

四 持久的努力

建部 遜吾

聖駕西に下向あらせられた折、門司驛で汽車に故障があつた爲に、同驛構内主任の自殺を遂げた事は、世人の知悉する

福岡縣、開港場、人口約五萬、九州鐵道の起點、下關と相對す。

マコーレイ

英國の論文家歴史家。

(1800-1859)

ギボン

英國の歴史家。

(1737-1794)

所であるが、斯くの如きは責任を重んじ、散際に潔い日本人の長所を發揮したものである。近頃幾分か封建武士に比して、此の風が薄らいでは來た様なものの、西洋人に比較すれば確かに一長所を成して居る。併し斯かる結末の美と云ふ事てなく、其の結末に至るまでの勤勉努力、即ち持久的・繼續的努力に於ては、遺憾ながら日本人は西洋人に劣つて居る。此の事は文章の上にも表はれて居る。

日本人の文章は直ちに結論を欲し、氣早く結論を投出すと云ふ風である。西洋人の文章はさうでない。例へばマコーレイの論集、ギボンの歴史等は容易に結論に達しないで、其の結論に達するまでの道行が如何にも大仕掛で、そして

其處に面白味を有して居る。日本人の長所は確かに長所ではあるが、此の大仕掛と云ふ西洋人の長所を、日本人の長所に加へたならば、愈、其の結論に美を添へる所以であらう。結論の努力に加へるのに道行の努力を以てする、是が努力を完全にする所以である。

そして此の適例を發揮したのは、我が國では先づ以て大石良雄を推さねばならぬ。城明渡しの當時、氣早の武士達は頻に復讐の結論を急いだ。然るに大石良雄の努力は實に非常なものであつた。彼の同志すら殆ど彼に愛相を盡かすまでに、彼は其の周囲の困難と戦うて、其の計畫に對する陰忍の努力を爲した。高輪の泉岳寺に烈士喜劍の墓があ

大石良雄

通稱内藏助、亡君淺野長矩の爲に吉良義央に復讐す。(二三一九―二三六三)

高輪

東京市芝區。泉岳寺

高輪車町、臨濟宗。

元祿十四年
東山天皇の年
號。(二三六)

る。是は大石の態度が餘りに努力の極に達して居つた爲に、當時の多くの武士が誤解した、其の誤解を人格化した記念碑である。

成程時間から言へば、元祿十四年三月から翌十五年十二月までは、僅かに一年と九箇月に過ぎぬが、當時の太平、風枝を鳴らさず、秩序亦整然たる、而も徳川幕府の麾下の中心地たる江戸は本所松坂町の吉良の屋敷へ、四十七人と云ふ大きな團結を以て乗込み、其の素志を遂げるのは、とても尋常の努力の企て及ぶべき所ではないのである。そしてこれは一に大石の陰忍なる大度量のある道行の努力に歸せなければならぬ。

吉良

名は義央、通稱上野介、徳川幕府の高家元祿十五年赤穂の遺臣四十七人に襲はれて殺さる。(二三六)

西郷南洲

名は隆盛、明治維新三傑の一人。(二四八七—二五三七)

近くは西郷南洲翁の生涯は、極めて仰慕すべき偉大なる人格の發露である。唯其の征韓論だけは、もう一息道行の努力をする覺悟、大目的の前の陰忍なる努力をしてくれたならば、韓國の併合は明治四十三年を俟たなかつたであらうと思はれる。

またかの徳川家康が天下を掌握したのは、かの南洲翁の征韓論とは國體上の意義がまるで違ふが、慶長三年八月十八日に豊太閤が歿して、五年九月には關が原に萬骨枯れると云ふ慘劇を演じた。其の勢を驅つて進んだならば、暮年ならずして天下は徳川の掌中に歸したに相違あるまい。然るにそれを十九年まで陰忍したといふのが、即ち結末の努

關が原

岐阜縣不破郡

城山
鹿兒島の鶴丸
城址。鹿兒島
市の西北山丘

ワシントン

北米合衆國
の國祖。

Washington
(1732-1799)

コオルンウ

オリス

英國の將帥
政治家。

Cornwallis
(1738-1815)

フランクリ

米國の政治
家。學者。

Franklin
(1706-1790)

力に道行の努力を合せた所の大努力で、南洲翁が結論を急いで城山に斃れねばならなかつたのに反して、家康が能く三百年太平の基礎を作つた所以で、尋常一般の所謂偉人の到底模し難い所がある。

外國の例では、かのワシントンが一七七六年米國の獨立を宣言し、一七八三年コオルンウオリスの大軍を撃破して、英國に獨立を承認させるに至るまでの努力は、實に非常なものであつた。又フランクリンが一匹夫から起つて、米國獨立の一大明星と仰がれるに至るまでの努力のごときは、同じく結末において道行において、完全な努力の典型である。西洋人はともすると其の晩節を全うせぬ事が缺點である。

Veruon

が、ワシントンの如きは斷然第三期の大統領に選ばれたのを斥けて、ヴェルノン山下の草庵に、晴耕雨讀の晩生を送つた。蓋し西洋には稀有な例で、努力は爾く結末と道行とを偉大ならしめる事に因つて尊嚴を加へるのである。

然らば努力とは如何なるものの謂であるか。生れてから死ぬまで、一刻のたゆみなく之を繼續せねばならぬものと思ふ時は、到底人間の企て及ばぬ所であるとして、吾人の意氣は沮喪せざるを得ないが、併し努力は爾く不斷に黽勉するの謂ではない。努力は活動と休息との交替を繼續するの謂である。易に乾の徳を稱して、天行健、君子以自彊不息と云つてある。其の天行を見ても、晝は日が昇り、夜は日が

Rhythm

没する。即ち晝は天行の活動時間で、夜は其の休息時間である。此の交替を整然として繼續するのが天行の健である。故に苟も道に志あるの士は、之を手本として自彊不息を行ふべきである。

實に努力の半面は休息である。此の二つを適宜に按排することが、眞の努力を成す所以である。休息のない努力は、心理學や生理學の上から觀ても其の原則に反する。總べて心理現象・生理現象・物理現象においては、リズムの形式を免れない。決して同一の状態を持久することは出来ない。森羅萬象悉く然らざる物はなく、山があれば川があり、丘があれば原があつて、總べて波の形に進むものである。故に

吉田松陰
名は寅次郎、
長門藩士、幕
末の志士。(二
四八八—二五
一六)

晝の活動には夜の安眠が次ぐ。六日間勉強をすれば、七日目には日曜が来る。六箇月間仕事をすれば、新年と盆と云ふ大休息が来る。斯くして努力と其の道行との美を完うすることが出来るのである。要は繼續である、交替である。

*吉田松陰は三餘讀書を主義として實行した。三餘讀書とは何か。病氣の時、牢に入つた時、雨の降る時、此の三つは時間の餘りであるから、之を以て讀書に充てると云ふ事である。是また交替繼續を完全ならしめる好適例で、努力の士は爾く何事にも天行の健を學ばねばならぬ。實に松陰は斯かる心掛を有して居つた人であつたから、今日ならば漸く大學を卒業する頃の齡で歿したにも拘らず、千載不磨の

水野廣徳

海軍中佐。

Em'en
Dresden

フオークラ
ンド島

Falkland
に在り、亞
爾然丁の東
南、英領の
群島。

ジュアン
フェルナンデ
ス

南太平洋中
の智利所屬
の島嶼。

Juan Fernandez

Cocos Island

勳業を成す事が出来たのである。要するに努力は持久的精神から發せなければならぬ。一時の發奮や感激では、克く大石良雄の如き陰忍を全うする事は出来ぬ。(新興國の青年)

五 エムデンとドレスデン 水野廣徳

エムデンとドレスデンとは、獨逸東洋艦隊の中で、最後まで残つて居た軍艦であつた。大正三年の十二月七日、南米フオー克蘭ド島沖の海戦に於て、辛うじて英國艦隊の追撃を脱し、爾來久しく其の消息を絶つた獨逸巡洋艦ドレスデンも、武運拙く遂に大正四年三月十四日、南米智利國の沖に在るデュアン、フェルナンデス島附近に於て、英國艦隊の爲

に撃沈せられた。これで太平洋、大西兩洋に在つた獨逸軍艦は、一二の假裝巡洋艦を除く外全滅した譯である。

ドレスデンは排水三五四噸、速力二十七節、備砲十吋半砲十門を有する輕巡洋艦で、大正三年十一月九日、印度洋のココズ島で、悲壯な最後を遂げた獨艦エムデンの姉妹艦である。印度洋方面に於けるエムデンの行動は、今尙我が國民の記憶に新たな所で、今改めて述べる必要はない。約三ヶ月の間、日英佛露聯合艦隊の警戒嚴かな印度洋上をば、人もなげに横行闊歩したエムデンの、勇敢で敏捷、大膽で細心な活動は、我々海軍軍人に對し、多大の教訓と刺戟とを與へたもので、敵ながら誠に敬服の至であつた。殊に其の最期

Sydney

たるや、勇烈・悲壯を極めたもので、勢力の遙に優れた英艦シドニーと奮戦し、煙突は碎け檣は折れ、備砲の全部は破壊せられ、乗員の過半は殺傷せられても、尙頑として降伏を肯ぜず、死を以て軍艦旗を擁護した壯烈さは、實に鬼神を泣かしめ懦夫を起たしめるの概があつたと云ふ事である。當時我が國の新聞の多くは、卑低な敵愾心に驅られて、エムデンに冠するに、暴艦とか狂艦とか、甚しきは海賊の汚名さへ用ひたものがあつた。併し斯くの如きは、國家の爲に勇敢に戦つてをる敵に對して禮を失したもので、我が高潔な武士道に反するものである。ドレスデンの最期に至つては、戦報が簡單であつた爲に、未

Glasgow Magellan 峽 マゼラン海
Kent

だ其の詳細を知ることには出来ぬが、エムデンの最期とは餘程その趣を異にして居る様である。ドレスデンはフォークランド島海戦後、マゼラン海峡を過ぎて再び太平洋に出で、デュアン、フェルナンデス島を根據とし、附近海面に出沒して、敵商船の搜索・破壊に従事して居る中、豫て索敵中であつた英國軍艦グラスゴー・ケント及び假裝巡洋艦オラマの爲に發見せられ、其の砲撃を受けること僅かに五分間の後、早くも自ら軍艦旗を下して降伏し、艦は間もなく爆沈したと云ふ事である。素より此の場合ドレスデンは、英艦隊に比して其の勢力が非常に劣つて居るので、萬に一つも勝てる見込のないのは明かである。併しながら戦争といふも

のは、逆も勝てぬからと云つて直ちに降伏する事を許さるべきではない。唯降伏の許されるのは、爲すべき總べてをなし、盡すべき總べてを盡し、進んでは戦ふ能はず、退いては脱するを得ない場合のみに限るのである。この場合と雖も、降伏は軍人として決して賞讃すべき事ではない。

然るに西洋人は、部下の人命を救ふと云ふ體裁の好い口實の下に、未だ爲すべきを爲し盡さないで、降伏するものが尠くない様である。例へば日本海海戦に於ける露國司令官ネボカトフ少將の如き、又青島に於ける獨逸總督ワルデツク少將の如き、吾々から見れば何れも軍人として遺憾の點が多い。戦時と雖も人命の尊重すべきは素より云ふまで

日本海海戦
明治三十八年
五月二十七日

青島

支那山東省膠
州灣口に獨逸
が經營したる
市街、軍港に
して商港。

ワルデツク
少將

Waldeck
青島總督、
大正三年十
一月七日我
が軍に降伏
せり。

もないが、國家の威嚴と國民の名譽とは、人命よりも尙尊いものである。

吾々は先にエムデンの最期を聞いて、獨逸海軍軍人の勇猛恐るべきを感じたが、ドレスデンの末路を聞くに及んで、獨逸海軍軍人も左程恐れるに足らぬとの念を生じたのである。エムデンとドレスデンとでは、其の艦力に於ては寧ろ後者の方が優つて居るのであるが、而も前者は獨逸海軍の爲に萬丈の光焰を擧げ、後者は獨逸海軍の名譽を毀損したのである。これ軍人たるものの深く省慮すべき點であつて、戰場に於ける軍人の覺悟は、唯「決心」の一語に盡されて居ると思ふ。(波のまに〜)

黑板勝美
長崎縣の人、
文學博士、東
京帝國大學助
教授、史料編
纂官。

Manchuria
オントリオ

湖
長一九〇哩
幅二五哩。

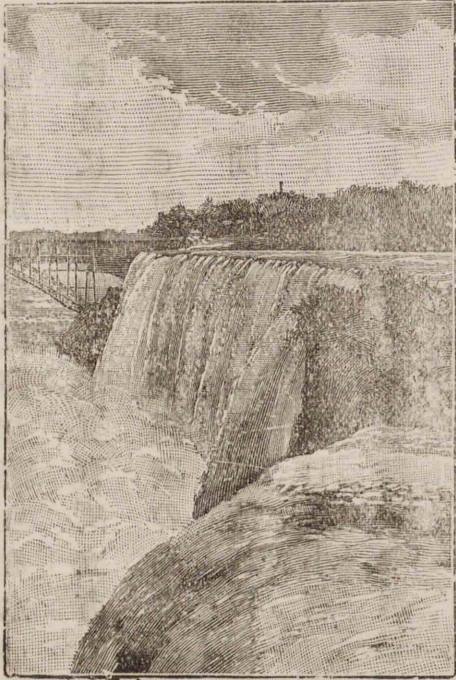
エリー湖
長二四〇哩
幅三〇乃至
六〇哩。

Niagara 河
ナイヤガラ
合衆國と加
奈陀との境
を劃す。
長三六哩。

六 ナイヤガラ瀑布 黑板勝美

水の大きいのは、太平洋上怒濤澎湃山をなす處であらう。一萬三千噸のマ*ンチュリヤ號が、木の葉の様に波浪の間を漂蕩したのは、まだ眼の前にちらついてゐる心地がする。併し米大陸に於ける合衆國と英領加奈太との境、平野遠く連るあたり、オ*ンタリオ湖とエ*リー湖とを通ずるナイヤガラに懸つた大瀑布の壯觀に至つては、實に水の奇絶、怪絶と謂はねばならぬ。毎年四方から集り來る觀光の客が、無慮七十萬に上ると云ふも當然のことであらう。此の天然を利用して、四十萬馬力の發電所を設け、幾多都市の電燈幾百

プロスペクト公園
ナイヤガラ
瀑布の沿岸
Prospect
アメリカ瀧
合衆國側に在
り、幅一〇六
〇呎、高さ一
六七呎。
Goat Island

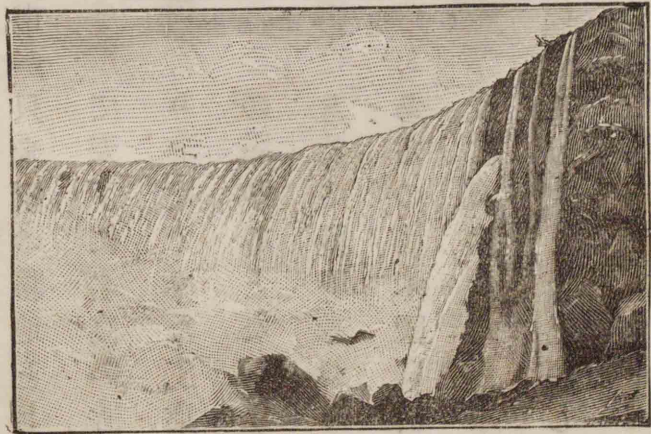


(一) 瀧のラガイナ

哩の電氣鐵道、および多數の製造工場の原動力を供給して居るので、今やナイヤガラの一小都市が、只米國の勝地として天下に名高い許りでなく、また工業の一中心とならうとして發展しつゝ、あるのは、米國に於ける天然の大と人工の大とを縮寫したものである。ナイヤガラ停車場を出て、馬車をプロスペクト公園に驅ると、近く一千六百呎の廣さのア*メリカ瀧は、

カナダ瀧
加奈陀側に在
り、一名馬蹄
瀑、幅三〇一
〇呎、高さ一
五八呎。

ゴート島を隔てて、廣さ三千呎のカナダ瀧とならんで居る。共に一百六十呎の高處から、白簾を懸けたかの様に漲り落ちる水量は、實に一分間一千五百萬立方呎、續いて兩岸の斷崖絶壁の高く聳えた間を、矢よりも早く流れ行く急流に、觀光客を満載した小蒸氣船の上下するなど、頓に氣宇が（二）大きくなる様を、そしてぞつと毛髪が豎つやうな、一種言ふに言はれぬ感興が生ずる。併しながらナイヤガラ（二）の壯觀は、此の



カナダの瀧

遠望に盡きるものではない。

アメリカ瀧の上、奔馬の様を急湍に横たはつたグリーン島を越えて、また橋を渡ると、木立の繁つたゴート島となる。下流遙に架つた八百四十呎の大鐵橋を望み、アメリカ瀧を右に、カナダ瀧を左に控へながら、巨人の様に悠然と其の間に立つ島の一角に佇むと、霧となり雨となる飛沫に衣袵は忽ち濕ふ。萬雷の轟くが如く崩れ落ちて水煙高く上騰し、夕陽と相映じて冲天に描き出す一條の長虹、如何なる名手の筆を以てしても、此の壯と美とを兼ね併せた絶景を寫すことは難いであらう。ゴート島のすぐ傍に、月島と稱する小さい岩島が横たはつて居る。明月の夕、月光に映ずる水

Green Island

Luna Island 月島

Table Rock 机が岩

煙がまた虹を生ずる奇觀から、此の名を得たとの事であるが、ゴート島の奇勝は、實に此の瀧壺のあたりに至つて窮るのである。島の西端に沿うて、斷崖の麓へと小徑を辿り下つて、瀧壺の傍に出て更に進むと、その後の所謂風洞が即ちそれ。人若し一たび洞中に入れば、轟立した絶壁の間に、凄然たる風の音、鞞鞞たる瀧の音、耳は遠くなる、眼は眩む、呼吸ははや止るやう。舊路を傳うて二たびゴート島の上に出て、漸く人心地に入つた後、プロスベクト公園に馬車をかへし、先に望んだ大鐵橋を渡つて、加奈陀領に入つて机が岩のほとりに到ると、幾百萬年の間に落下した水の力で、いつしか馬蹄鐵の形を成

Queen Victoria Niagara
Fall Park
ヴァイクトリア
ア女皇公園

したカナダ瀧の渾然として雄大な光景は、アメリカカ瀧の容易に及ぶ所ではない。昇降機で瀧壺の後に出る仕掛、さてはヴァイクトリアア女皇公園の設備など、此の勝景に對して出来るだけの力を盡して居るのは、加奈陀領でも又決して合衆國に劣ることはない。(歐米文明記)

徳富蘆花

名は健次郎、蘇峰の弟、熊本縣の人、小説家文章家。(二五二八)

岩崎谷

鹿兒島鶴丸城址の背後に在る一凹地、南洲終焉の地。

城山

鶴丸城址。

三十七年前
明治十年九月

七 岩崎谷

徳富蘆花

南洲最期の跡を弔ふべく岩崎谷に入る。城山の蔭に隠れた塹壕の様に狭い谷である。其の谷の東口、もう町へ出ようとする處に、花崗石の石塀で四角に圍うて、南洲翁終焉之地の石碑が建てられてある。三十七年前の今月今日の天

二十四日。
逸見

名は十郎太、
陸軍大尉、城
山にて自殺す
(一五三七)

西別府

鹿兒島市外の
北方にある村

別府

名は晉介、陸
軍少佐、城山
にて西郷の首
を斬りて後自
殺す。(一二五
三七)

大島

大隅國大島列
島中の最大島
鹿兒島の西南
二〇五哩、東
西一五哩、南
北五哩。

月照

幕末の勤王家
京都清水寺の
住僧、安政五
年薩摩湯に投
じて死す。(二

明の頃、狩り立てられる熊の如く、洞窟の中からのこく出て来て、一度ならず最期を促す氣早の逸見を「まだく」と制しつゝ、最期の晴着と、數日前にそつと西別府（西別府）の留守宅から取寄せた青縞の絹の單衣に兵兒帶を締め、素足に新しい草鞋を穿いて、谷口さしてやつて来る内、山の上から亂射する官軍の銃弾に、肩から股を貫かれ、彼自身手負であつた別府を呼び掛け、「晉どん、晉どん、もう宜かる」と云うて、太つた頸をさし伸べて、別府に斬らしたのは此の地點であつた。嘸よ（嘸よ）い氣持で、魂はあの巨體を離れたであらう。
子供の時喧嘩して相手に肱を切られたが、淺傷でのがれ、大島三度の島流しに難船したが死にもせず、月照と身投をす

四七三―二五
一八

長井村

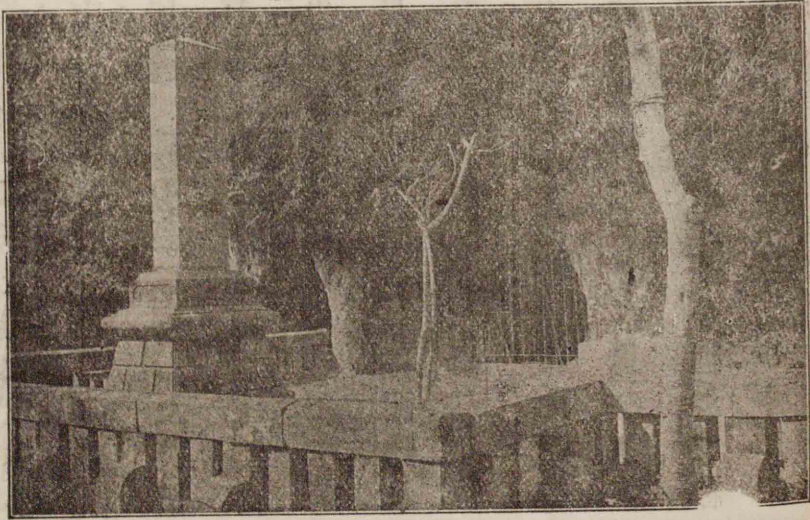
宮崎縣臼杵郡
北川村大字長
井、熊田の南
一里、西南戦
争の時賊將の
退保せる營柵
地。

五十一期

文政十年(二
四八七)に生
れ、明治十年
(二五三七)に
自殺す。年五
十一。

れば息吹き返し、江戸城受取の前後、つけ狙ふ徳川方の弾も切先も身に及ばず、朝鮮に死なうと思へば征韓論は破れ、はては袋の鼠となつた長井村でさへ死に切れず、やつと此處で五十一期の役を済し得たのを見れば、人間中々死ねないものである。
長井村の谷を何百分一に縮めた岩崎谷を奥深く進んで、

窟 洞 谷 崎 岩



笑儂向死
云々

百戰無功半歲
間。首邱幸得
返家山。笑儂
向死如仙客。
盡日洞中棋響
閑。
杉聽雨
名は孫七郎、
子爵、山口縣
の人。

翁が穴居の洞窟に行つて見る。此の前に來た時には無かつた鐵柵が洞門を塞いで、今は中に入れない。是も前には無かつた洞中記念碑が建つて居る。碑の裏に刻した笑儂向死如仙客、盡日洞中棋響閑の七絶は、實は杉聽雨居士の詩ださうな。暫く碑前に佇む。九月末のまだ夏めいた午前の光が岩崎谷に降り込む。小鳥が鳴いて居る。谷間隠れの人家に機織る響が聞える。洞窟から少し往くと、谷の行止りに、新しく開鑿された隧道が窅然と口を開けて居る。二條の鐵軌が、一端は其の隧道に没し、他の一端は洞窟の近くを這ひ、ずうと谷を通つて、終焉記念碑の前から町に出て、鹿兒島停車場に達して居る。

市來
鹿兒島縣日置
郡串木野の東
南。
川内
同縣薩摩郡。

櫻島
鹿兒島郡に屬
す。周回十里、
鹿兒島市の前
面二裡。

此は鹿兒島から市來を経て、川内へ通ずる新設の鐵道で、市來までは工事已に落成し、開通式も不日行はれることになつて居る。斯の悲壯の谷を通じて煤烟の漲るのも、こゝ二三日の内である。要するに生きた現代は刻々歴史を破壊しつゝある。「俺等を攻め殺す程に平民の徴兵がなつた」と、南洲翁は喜んだと傳へられる。あとくくと生れて來る者どもの爲とあらば、頭のうへを踏んで通られても腹は立てまい、喜ぶであらう。併し我儕は少し無慘な氣持がする、惜しく思ふ。谷からすぐ山の背につけられた路を辿つて城山にのぼる。公園になつて居る。市街は一目、大隅の遠山かけて櫻島の

眺望は得も云へぬ。山上の松樅の大木の中には、三十七年前の砲彈の殺威を見せて、ぼつきりと梢の折れたのがある。それすらあとから出た枝に、まだ盡きぬ生命の程を見せて居る。若木はもとより南國の日を浴びて、雨の様な秋蟬の音を降らしながら、縁を競うて居る。(死の蔭に)

八 有史以前の歴史

現代文明の發達史を研究せんには、まづ原人種につきて、其の知識の程度及び生活状態如何を知らざるべからざる事恰も一偉人の人となりを審かにせんには、其の幼年時代に遡りて、其の成長發達の經路を究めざるべからざるが如し。

蓋し原人種は人類の搖籃時代に當れるを以てなり。されど此の時代には、文字記録の徴すべきものなきを以て、其の状態を知らんと欲せば、他の方法によりて之を攻究せざるべからず。進化論者の説に従へば、現時の文明人も皆有史以前に於て、現在の野蠻人の如き生活を一たびは經過したるものなりと云ふ。故に是等野蠻人の生活状態及び習慣等を研究する時は、やがて文明人の搖籃時代に於ける眞相を推知し得べし。又原始時代の人類は幾多の遺跡・遺物を後世に残せり。例へば日常使用せし武器・家具の裝飾品、並に穴居の跡、墓地等の如き是なり。是等を研究する時は、工作的技能並に知識の程度を知り得べし。

人類が地球上に現出せしは、果して何時頃なりしか、今詳に之を知ることは能はず。唯氣候及び地形の現代と大に異なる時代に於て、現今已に滅絶せし動物と共に棲息せしを推知し得べきのみ。何となれば原人種の遺物は、化石時代の動物の遺骨と同在せるを以てなり。是等は地中深く埋没せし泥灰粘土等にて覆はれ、空氣中に晒さるゝことなかりしを以て、永年間原形を保つことを得たりしが、今後道路邸宅の改築、又は鐵路の開鑿等の爲に發見せらるゝことあるべし。歐羅巴にて、是等遺物を發掘して原人種を研究せるは六七十年以來の事なり。遺跡遺物により歴史を研究するを考古學と云ふ。考古學

化石時代の動物の遺骨と同在せるを以てなり。

Morse

大森
東京府荏原郡



人類の先祖

我が國にては、明治十二年米人モールス氏が、東京市の郊外大森にて貝塚を發見せし以來、原人

を斷言せり。

者は、鬍髯によりて原人種の容貌體格を知り、遺跡遺物によりて生活狀態を研究し、以て現今の野蠻人と大差なきことを斷言せり。

種に關する研究起れり。

有史時代は比較的短くして、それ以前幾千年、幾萬年間續きしか、今は殆ど其の大數さへも知り得ざるなり。考古學者

Mammoth マンモス
今は死に絶えたる舊世界の巨象。

は其の使用せし武器家具の材料によりて、大凡これを四時代に分てり。即ち粗製石器時代(古石器時代)・磨製石器時代(新石器時代)・青銅器時代及び鐵器時代これなり。此の四時代は其の長さ一様ならず、粗製石器時代の如きは鐵器時代の十倍以上も長かりしならむと云ふ。又各時代は必ずしも劃然と區別し得ざること、恰も近世に於て、蒸氣時代と電氣時代とが互に相錯綜せるが如し。

粗製石器時代は最も舊くして、其の遺物は砂礫の中又は河岸の岩窟に發見せられ、佛國のヴェヅエル川の岸に最も多し。石器と共に河馬カマ・穴熊アナクマ・マンモスマンモス・馴鹿トナカイ・大鹿オオカ等の如き、現今其の地に絶滅せし動物の骨は發見せらるれども、鹿・牛・馬等の

Columbus
新大陸
亞米利加。コロンブスがアメリカを發見せるは西暦一四九二年。

の骨は發見せられず。

此の時代には漁獵を事として穴居し、粗製石器を使用し、犬と馴鹿との外家畜なく、陶器を作る術を知らず、未來を考へて葬式を營むことをなさざりしが如し。此の時代の終に火の發明ありて、人智俄に進歩し生活状態を一變せり。中にも竈は家族生活、祭壇は宗教生活、熔礦爐は工業生活の中心となれり。弓矢は此の時代既に狩獵及び戰爭に要する重なる武器なりき。

磨製石器時代の人類も石器を使用せしが、稍精巧なる磨製のものを用ひたり。コロンブスの新大陸發見時代に於ける土人は、恰も此の時代に屬せり。此の時代には陶器を作

り、土地を耕し野獸を馴らし、家屋を建て土壘を築き、絲を紡ぎ衣を織ることを知り、死者をば副葬品とともに埋葬せり。蓋し未來の生活を信ぜし表徴なり。我が國の原人種がコロボツクル種族なるか、アイヌ種族なるかは未解決の問題なれども、貝塚に發見せらるゝ遺物は、何れも磨製石器時代のものなり。

此の時代の人類は、野獸をして人間に馴れ人間の援助者たらしむるに至らしめしが、是等動物の馴養は歴史上新時期を形成し、是より獵師は牧畜者と化し、狩獵時代茲に去りて、牧畜時代新に來れり。穀物中最も重要な大麥・小麥は、初めバビロニアの平野に播種耕作せられ、次第に歐羅巴・亞細

Babylonia バビロニア
今ベルシャ
灣に注げる
ス・チグラ
ス二川の
間に挾まれた
る古昔の國

亞に擴まれり。斯くて狩獵者・牧畜者としての漂泊人は、今や土着の人民となり、市街は建設せられ、物質的・非物質的の貯藏物は保存せられて、之を相續者に傳ふるに至り、人類は茲に始めて政治的生活に入り、部落は市となり、市は次第に結合して小國家となり、進んで大國家となれり。これ古來何れの國人も農耕の術を最も重要なものとし、播種・耕作を以て神の教訓、神の仁恵に歸したりし所以なり。

青銅器時代にては、金屬を鎔かす術を發見するに及びて、まづ武器を作ることを努めたり。蓋し金屬の中、銅は採掘最も容易にして、而も鎔鑛に高度の熱を要せざるを以て、銅器は最も早く製出せられしなり。然るに銅は撓み易くして、

Homer ホーマー
西紀前九百年頃のギリシヤの盲詩人。自作の物語詩を語りつゝ諸國を巡遊す。

武器に用ひ難きを以て、之に錫を加へて青銅を作るに至れり。此の時代には、武器としては刀・槍・斧・鉞等、日用の具としては小刀・槌・鋸・釘・釣針等あり、耳環・腕環・留針等の裝飾品亦多く青銅を用ひたり。我が國にては、銅・鉞・銅鐸・銅鈴等多く發見せらる。鐵器時代にては、鐵の製出法を知るに及び、直ちに之を武器に使用したり。ホーマー時代には、鐵は劍を作るに用ふる貴き金屬として使用せられ、銅は他の目的に使用せられたり。鐵にて造れる斧・刀・劍・楯等は、石又は木材の棺中に在る髑髏と共に存在し、また古戰場及び沼澤の底等にも發見せらる。

凡そ人類は右の四時代の順序によりて發達するを通例とすれども、凡べての國民が同時に同時代に在りしにあらず。

Negros ネグロ
アフリカ洲土着の黒人種。

例へば埃及人が既に鐵器を使用せし時、希臘人は青銅器時代に屬し、丁抹人は猶石器時代に在りしが如し。又凡べての國民は必ずしも此の四時代凡べてを經過するものにもあらず。例へば亞弗利加のネグロの如きは、歐羅巴人と接觸するに及び、石器時代より一躍して鐵器時代に入れるが如し。有史以前の歴史的研究は尙甚だ幼稚にして、原人種の生活状態は、偶然發見せらるゝ遺物によりて之を推想するに過ぎず。これまで發見せられし遺物無數なれども、吾人の知らんと欲する所に向つては、甚だ僅少の材料を供給するに過ぎず。
(齊藤斐章著「西洋文明史觀」に據る)

近松秋江

本名徳田浩司、岡山縣の人、小説家。

伊吹山

滋賀縣坂田郡琵琶湖の北方岐阜縣界、海拔四五六〇尺

鈴鹿山

三重縣鈴鹿郡近江・伊賀に跨る。

九 車窓の伊吹山 近* 松 秋 江

是まで幾度か東海道を往復して、沿道の眺望には見飽いて居ながら、私は近江・美濃の境に跨る伊吹山^{*}を仰いで關が原を通過する時ぐらゐ、何とも云へない感興に耽らせられることはない。箱根を越える時、また關西線によつて鈴鹿山^{*}を越える時でも、此の關が原を通る時ほど感慨に迫られることはない。

私は車窓から顔を出して、遙に伊吹山の雄姿を求めて居た。まだ朝じめりの乾き果てぬ麗かに澄み渡つた五月晴の碧空は、眩いばかりに輝き、嫩かな新緑を以て彩られた野山には、あるともしも覺えない白い春霞が一面に立罩めて居る。待つ程もなく其の行手の空に當つて、伊吹山の一角は列車の進む軌道の曲折につれて、見えつ隠れつ現はれて來た。「あゝ、伊吹山が見える。」と、私は思はず車窓に面して獨語した。頓て「好い山だ。」と、私は感歎の聲を放つた。さう云ふ中にも、山の全姿は車窓に向つて滿幅の繪畫を展開して來た。「好い山だ、今日はまた不思議にはつきりと能く見える。」私は重ねて感歎の聲を洩した。全く今日ぐらゐ伊吹山を能く見たことは、二十餘年來屢、此處を往復して居ながら初めてである。

伊吹山！何と云ふ記憶に懐かしい山であらう。私の幼年

平治の亂

平治元年藤原信賴・源義朝の謀叛を云ふ

鎌田政家

源義朝の臣、平治の亂後、頼朝と共に尾張に奔り、勇長田忠致に殺さる。(一七七九—一八一六)

六波羅

平氏の邸の所在地、今京都市下京區六波羅密寺及び方廣寺の邊、七條より五條松原に至る。

時代から少年時代に至る間の修養と趣味とは、常に日本の舊史と其の史蹟に關聯する地理とにあつた。私が初めて伊吹山を知つたのは日本外史からである。平治の亂に一敗地に塗れた源義朝が、其の時年齢尙十三の一子頼朝を引連れ、僅かに鎌田政家等二三の家の子に擁せられて、東國を指して落ち行く途中、積雪の爲に父子道を失ひ、頼朝は遂に平氏の追手に捕へられて、六波羅の清盛が屋敷に引いて行かれた。日本外史に、「伊吹山麓に捕へらる」とあるが、どんなに私の哀感をそゝつたことであらう。私はそれを能く記憶して居て、自分が十九歳で初めて上京する時にも、汽車の窓から此の伊吹山を探り眺める事を忘れなかつた。

逢坂の關

滋賀縣滋賀郡大津の南、京都府界、關址は今の六谷驛附近。

比良山

同縣同郡、琵琶湖の西岸、海拔二九〇〇尺、暮雪は近江八景の一。

比叡山

同縣同郡、京都府愛宕郡に跨る、海拔二八六〇尺、山上に延曆寺あり。

不破の關

岐阜縣不破郡關原村大字松尾の大木戸阪、東山道の要路、古三關の一。

都を離れ失意の胸を抱いて北國に落ちて行く人、或は東山道を経て遠い奥州の果に歸る人、其の人々が逢坂の關を越えて、湖水の彼方に比良比叡の峰々を遠く振返りつゝ、近江の野路を行く間は、まだ後にして行く都の名残も偲ばれた。一度不破の關を過ぎてしまへば、都は愈、雲井の空に遠ざかるばかりである。知らず、古來幾人か此の山麓を過ぎて、憂愁の眼に山頂の雲を眺めたことであらう。私は或年の晩秋・初冬の頃此處を通つた。それは遠い外國に行つて亡くなつた兄を弔ふ爲に歸國して、再び東京に歸る時であつた。雪模様の灰色の雲は遙に低迷して、黄褐色にうら枯れた伊吹山は、憂鬱な空の表にはつきりと浮び出

て居た。

又或年は夏の終る時分に此處を通つた。其の時私は中央線によつて名古屋に出て、漸く日の暮れ初める頃、尾濃の平野を通つて行くと、名古屋あたりから蒸す様に暑かつた空は、一面に墨を流した様に搔曇つて、千頃の青田にはものものしい嵐が颯と波を揚げた。と思ふ間に、大粒の雨滴は早くも横ざまに車窓を打つて來た。風は益、強く吹いて、頓て銀箭の如き急雨は沛然として降り濺いで來た。其の篠つく雨の音の中を、列車は轟々と響をあげて駛つて行つた。そして大垣を過ぎる頃には、さしもの豪雨も何時しか止んで、沿道の草木は眞青に洗ひ清めた様な艶やかな濡色を見

大垣

岐阜縣安八郡の都會、岐阜市の西南四里人口約二萬。

村山龜齡

新潟縣の人、文章を能くす。

宗盛

平清盛の次子、壽永亂後近江篠原に斬らる。

(一八〇七一—一八四五)

相國

太政大臣清盛(一七七八—一八四一)

せ、雨氣を含んだ冷かな風が開け放つた窓に流れる様に吹入つた。其の時車窓の遠望は、遙に伊吹山の雄姿を認めた。其の方の空には、まだ降り足らぬ様な凄じい夕立雲が黒く鎖して、伊吹山は薄暮の天際に人を脅かす様にそゝり立つて居た。私は其の雨後の伊吹山をも忘れることが出来ぬ。そして今日はまた珍しく五月の陽光の中に、氣象の加減で稍、距離を置き、匂はんばかりの淡藍色に染めなされて、明媚な温容を示して居る。(青葉若葉)

一〇 平相國の薨去

村山 龜 齡

宗盛東征の途に發するに先立つ纔かに一日、相國俄に病に

閏二月四日
養和元年。(一
八四一)
夫人
二位の尼平時
子。

かゝりぬ。げに怪しき病なりき。滿身熱すること鐵火のごとく、人ながく傍に侍する能はざりしと云ふにあらずや。偶、水注を把りて背に濺がんとすれば、其の水湧きに湧きて熱湯に化せしと云ふにあらずや。而して入道が叫號苦悶の聲、實に全邸に響きわたれりと云ふにあらずや。吁、その病の起れる、寔に東征の軍旅將に發せむとするの前宵なりしと云ふにあらずや。我等をして姑く傳説を信ぜしめよ。凡そ歴史ありてより、斯くの如き類例何處にか在る。かくて宗盛卿以下征東の將卒期を失して發せず、上下茫茫焉として其の爲す所以を知らざるなり。
閏二月四日疾大に篤し。舉族枕を擁し、夫人涕を流して言

保平
保元・平治

伊豆の流人
賴朝を指す。

はむと欲する所を問ふ。相國うちうなづき、大息之を久しうして曰く、生者必ず死あり。何ぞひとり我のみならむや。われ保平よりこのかた、功を皇室に建てて天下を專制し、位人臣の極に到りて、こゝに帝者の外祖となる。平家の面目、一身の光榮、世に思ひ遺すこととてなし。たゞ今に於て憾みとなすもの、伊豆の流人が首を見ずして死すること是なり。あゝ、あはれ、是こそまこと千秋の無念なるなれ。敢て一門の子弟に入道が最後の所存を傳へよ。われ死するの後、特に經を誦するを休めよ。堂塔伽藍の如き何するものぞ。希ふ所唯一、急速東國に討手を下し、早く賴朝が首を刎ねて我が墓前に梟せよ。今生、後世の孝養何物か之に如か

經が島
福原の海を安
全なる船泊り
にせんとて防
波の爲に清盛
の築ける島。
築島ともいふ
其の跡今攝津
武庫郡北濱の
邊にあり。

むと。終に苦悶の中に薨ず。年實に六十有四。
嗚呼、太政入道平清盛は斯くの如くにして薨じぬ。千萬の
軍旅、天下の富貴、兩つながら生命を購ふに足らざるを奈何。
今や怨敵闖外に逼りて、祖龍内に俄に仆る。一門郎黨また
何をか頼み誰にか憑らむ。東國追討の遺命空しく將士の
耳朵に残ると雖も、たれか克く成功を百里の外に期するも
のぞ。止みなむ、止みなむ。
超えて七日、入道が遺骸は北邙一片の煙となりぬ。法眼圓
實この豪骨を奉じて攝州に赴き、之を經が島に納めぬ。た
だ見る、朝霞暮靄いたづらに墓面に搖曳し、春花と秋月とか
たみに相國が亡靈を弔ふ。英雄の心事何人か解するもの

ぞ。かくて年空しく來り、歳空しく徂く。

(平家詩史)

橘南谿

名は春暉、伊
勢の人、醫者、
文學者。東西
を漫遊す。(一
二四六五)

五箇邑

肥後國球磨川
の水源地方に
在り。

壽永

安徳天皇の年
號。(一八四二
一八四三)

須磨

兵庫縣武庫郡
神戸市の西南
約一里半。一
の谷の合戦の
古戰場。

一一 五箇邑

橘 南 谿

熊本の旅人宿に逗留せし頃、五箇邑の事を尋ねしに、宿の者
のいふは、それは残り多き事なり。この國慶事の祝儀の爲
に、よべまで五箇邑の頭分の者一人百姓數人を召連れて、此
の家に數日逗留せしに、今少し早く來り給はば、同宿して語
り合ひ給ひ、面白き物語もあるべかりしものを」と口々にい
ふにぞ、いと本意なくて、せめてもと此の地の人に五箇邑の
事を尋ね問ひぬ。
其の話に曰く、壽永年中、平家の人々京都を落ち、須磨の屋形

屋島 香川縣木田郡
 湯元村、古高
 松の北一條の
 干潟を隔つる
 海島。
 赤間が關 下關、馬關に
 同じ。山口縣
 こゝは其の東
 なる壇の浦を
 指す



をも義經に破られ、又讃岐の
 屋島の軍に打負け、長門の赤
 間が關の海中に、一門残らず
 入水と披露して、其の實は肥
 後の極山中に隠れたまひぬ。
 其の後世の中鎌倉に歸して、
 平家の人々は永く山中の土
 と朽ち果て給ひぬ。其の隠
 れ給ひし處今の五箇邑なり。
 南北およそ二十里許り、東西
 一二里より三里許りもあり。

豊後 原文に豊後と
 あれど、實は
 日向なり。

大関

豊臣秀吉。

元和

後水尾天皇の

年號。(二二七

五―二二八三)

寛永

後水尾・明正・

後光明天皇の

年號。(二二八

四―二三〇三)

熊本

熊本侯細川氏

清和源氏より

出づ。領地五

十四萬石。

東は豊後、北は阿蘇、南は球磨、西は熊本なり。何方より入る
 にも皆二十里餘りありて、其の峻阻なか〜いひ盡すべき
 にあらず。更に道とてもなし。その故に平家の人々の子
 孫、年々に繁榮して數千人に及び、數百年が間一向に人間の
 通路は絶えはて居たりしが、足利の末にや太閤の始にや當
 りけん、川上より椀の流れ來れるをふと見つけて、此の山奥
 に人の住めりと知りて、やう〜尋ね入りて、始めて此の五
 箇邑の人この世に通ぜり。彼方の人の世間へ出て、始めて
 人交りをせし事は、元和・寛永の頃にもやあるらむ。此のあ
 たりにては熊本は名家なれば、其の手に屬したきよし申立
 て、おほやけにも其の由聞届けられて、熊本の支配とし給ふ。

されど本領の外なれば、さして領分と云ふにもあらで、只支配と云ふのみなり。それよりこのかた、多年熊本より鹽幾十俵を賜ふ。彼方よりは五人の頭分の者、かはるゝ年始の禮詞をつとむる爲に、熊本に出づるなり。熊の皮數十枚を禮物として年毎に献上す。昔よりかの地に五人の頭分あり。故に其の地を五つにわけて、各一箇所づゝを司り保つ。此の故に世間より五箇邑と云ふ。其の人皆質朴にして武を勵み、男子は皆長き大小を横たふ。みづから平家高貴の人の御末なりと高ぶる。此の地別に君とよぶ者もなく、年貢を納むるといふ事もなく、穀物は土地廣きによりて、手柄次第に作り取るなり。人の心すなほに、衣食も餘りて、

秦の始皇帝
名は政、六國
を滅して天下
を統一す。

桃花源
晉の陶淵明の
桃花源記に見
ゆ。但しそは
假設の記事な
りと云ふ。

争ひ怒る事もなく、上古の世に似たり。又平家傳來の寶物甚だ多し。樂器・刀劍世に珍しきものありといふ。他の人は容易に入ることを許さず。只醫藥の事におろかなる故に、醫者は入ることを許し、甚だ之を重んじ愛すとぞ。かねてより其の地に至り見んと思ひし事なれば、此の物語を聞き、神馳せ魂飛ぶが如き心地せしかど、道といふもなく、殊にいろゝの嶮絶の所ありて、かの所の人と同道せざれば、熊本の者さへ至ること能はずと云ふにぞ、力及ばずしてやみける。この五箇邑の事は、唐土の昔、秦の始皇帝の虐政をさけて、桃花源に隠れ住み、其の子孫繁昌して、數百年の後はじめて人間に通ぜしといふにさも似たり。(西遊記)

五十嵐力
早稻田大學教
授。

一 二 浮花 五 十 嵐 力

八月の或日である。五時に起床、朝飯をすましてから、例の如く庭に出た。黒い庭を一巡して花庭に行くと、数々の草花が仲善さ相に櫛比鱗接して、露ながらに朝日を迎へて居る。何とも云はれぬ愛らしさ賑やかさに、ふと思ひ付いたのは、種々の花を澤山水盤に浮べたら綺麗であらうといふ事であつた。早速鉢と籠とを持つて來て花びらを集める。それから座敷に入つて、徑一尺ばかりの古伊萬里の鉢に水を湛へて、紅・黄・白・紫と段々に點じて見た。實に綺麗である。紅蜀葵の直徑四寸餘なる大輪を中心として、ダリヤ・蝦夷菊

枝ながら
萩の露玉にぬ
かんとすれば
消ぬよし見む
人は枝ながら
見よ。
(古今和歌集)

臨濟

禪宗の一派、
支那臨濟の
義玄禪師に出
づ、僧榮西之
を我が國に傳
ふ。

大原

京都府愛宕郡
京都市の郊外

寂光院

大原村西北の
澗、字草生、
天台宗延曆寺
別所、建禮門
院の陵あり。

壇の浦

山口縣豐浦郡
馬關海峡の東
北にあたる。

桔梗・木朝顔・花菱・撫子・睡蓮の中位に大きいものから、天竺葵・日草・孔雀草・矢車草・茄子・胡瓜・大角豆・美人草・花魁草等を経て、紫の露草・纈纈の露草・置去草・藤袴・萩・女郎花等の細かいのに至るまで、凡そ三十種ばかり、小さい陶器の湖の中に妍を競つた有様は、實に目も覚めるばかりの美しさであつた。自然の樂しみ方にも色々あるなど考へつゝ、「枝ながら見んと云つた古人の自然的風流などを偲びつゝ、暫く眺めて居る中に、ふと臨濟の一法友から聞いたことのある洛外大原の寂光院の「浮花」の事を思ひ出した。續いて壇の浦に於ける平家滅亡の折の海上の光景を思ひ浮べた。大原の寂光院では、鐵鉢に水を盛り、枝も葉も着かぬ花びらを浮かして

幼帝 安徳天皇。
 二位殿 平清盛の後室時子。
 女院 建禮門院平徳子。

佛に供へるといふ事であるが、それは何の意味であらう、如何なる謂はれに依るのであらう、私は知らない。けれども此の謎の様な供花の法は、或は平家の公達、女房達が、壇の浦の波の上に花と散つた末期の光景を象徴して、幼帝、二位殿を始め、一門の菩提を弔ふのではあるまいか。緋の袴を召した女院の氣高い御姿を繞つて、數多の女房達の水に浮んだ光景は、紅蜀葵の大きな赤い花を繞つて、桔梗、朝顔、露草などの浮いて居るのに似ては居なかつたらうか。斯様なことを考へつゝ、私は果敢ない樂みに半日を費した。そして此の半日の花いちぢりによつて、圖らず花やかな悲みと、寂しい喜びとを味はふことが出來た。小さな水鉢の浮

花の中に於いて、「幼帝入水」・「大原御幸」の二つのしめやかな味深い物語を讀むことが出來た。(我が書翰)

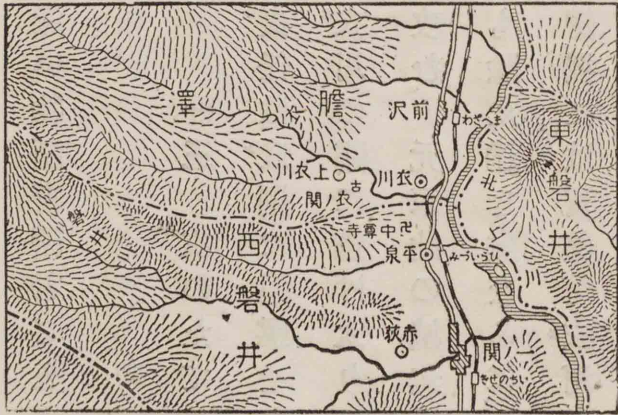
一三 衣のたて

新保磐次

貞任は武則に追撃せられ、高梨・石坂の二柵をも棄てて、辛く衣川の關に逃げ入りぬ。頼義軍を進めて三道より衣川を攻む。元來此の城無雙の要害にして、一夫險を守れば萬夫も踰え難き處なるに、大木を切懸けて逆茂木となし、柵外の總堀には、賀美河・衣河の二水を堰き入れたり。折しも霖雨絶間なく、濁流滔々と逆卷きて、鳥ならでは柵内に入るべくもあらざるに、勇猛絶倫の貞任が、奥州の荒武者一萬餘騎を

新保磐次 新潟縣の人、一村と號す。
 貞任 安倍頼時の長子、前九年の役、厨川に敗死す。(一六七五—一七八一)
 武則 清原氏の、出羽の俘囚長。
 高梨 岩手縣西磐井郡赤荻村の地。
 石坂 高梨と共に赤荻村の邑内にありし地。
 衣川の關 岩手縣膽澤郡衣川村。
 頼義 源頼信の子、鎮守府將軍。(一七三五—)
 衣河 岩手縣膽澤郡北上市に入る長き四里。

率めて籠城しければ、たやすくは落つべくも見えざりけり。こゝに武則が家の子に沼太郎久清と云ふ者あり。輕捷にして飛超すること、春鳥の枝を渡り、秋猿の果を争ふに似たり。武則自ら堀際を見廻りて、兩岸の樹木相向ひて差出でたる處あるを見、久清を召して密かに命ずる所あり。久清旨を領し、われに劣らぬ勇士三十餘人を伴ひ、深夜藤繩の三十丈許りあるを吾が腰につけて、此方の岸の大きな椋樹の梢に攀ぢのぼり、彼方より差出でたる梢にひら



蜀川
蜀は支那の地名、山道の險を以て名あり、其の地の川橋梁を架するに術なく繩を以て橋とせるを云ふ。

義家
源頼義の長子
通稱八幡太郎
(一七〇一—
一七六八)

りと跳びうつり、繩の端を彼方に結び付くれば、此方の端も椋の根に結び付けられて、音に聞く蜀川の繩の橋を成したり。勇み進める三十餘人は、猿猴の行列をなす如く、此の繩を手繰りて向ふの岸に越え、大藤内業近が守れる柵に忍び入りて火をかけたるに、折節風烈しくして炎十方に飛び散り、火の手此處彼處に起れり。思ひがけなき事なれば、城中謀叛の者あるならんと、上を下へと騒動する間に、三道の寄手は逆茂木引退けて、猛火の下より切つて入る。運傾ける貞任は、力なく搦手より脱け出でて落ち行く處に、義家弓に矢を注ぎて追掛けながら大音を揚げ、「汚くも後を見するものかな。暫く返せ、物言はん」と云ひければ、貞任屹

と見返りたるに、義家、
衣のたては綻びにけり
と下の句をよみかけたり。貞任馬の鼻を引返し、兜の鍔を
振向けて、

年を経し絲の亂れの苦しさに

とぞ付けたりける。其の時義家番ひたる矢を引外して歸
りければ、貞任は虎口の死を免れけり。馬廻の兵ども其の
故を問ひければ、義家の云ふやう、此の年來義家が矢面に向
ふ者、一人も生きて歸るものなし。貞任之を知りながら優
しくも仕りたるものかな。かゝる勇者を一矢に射落さん
こと無骨なり。とぞいひける。古の武士の優長にして、死生

の間に悠々たりし氣象以て見るべきなり。(趣味の日本史)

一 殿中の刃傷 村上浪六

元祿十四年三月十四日、天禮の終として白書院（シロシヨウイン）に將軍勅答

白書院

江戸城居間の
名。大廣間の
北庭園を距て
て位す。上段
下段の二間あり。

の式日、閣老有司の面々は素より譜代外様あらゆる諸侯の
總登城は巳の上刻。千代田の春に武家の莊嚴を極め、關東
の勢、柳營の威儀、廣々たる殿中、今日を晴と出仕の席に従ひ
順に就いて、敕使院使の御登營をいまかくと待ちうけぬ。
別けて今日は公武周旋の典禮作法に出頭第一の老功たる
吉良上野介、松の御廊下口を控へし一室の正面に着座して、
我なくばと四方を見廻す體。

淺野内匠頭

名は長矩、播州赤穂城主。

(一三二七二—三六一)

鬼畜に總身の肉を食まるゝ如き心地しながらも、遁るゝ道なき淺野内匠頭、恐るゝ其の前に亡り出づれば、じろりと見て、

「ほゝう、昨日の問合に、『長は無用』と申した上野の一言、今日許りは神妙に守られて、烏帽子・大紋を召されたな。萬事その通りに致さるれば、此の程より度々の御失體も無い筈ぢやに。」お言葉謹んで有難く承ります。就きまして内匠なほ一應差當り御指圖を。

「何、差當つての指圖、如何様の儀で御坐るの。」

「今日の御儀式に、傳奏方御着の砌、内匠の御役目として、お玄關の式臺に御迎へ申上げませうや、たゞし御式臺下にて

御迎へ申上げませうや、お指圖を下さりますやう。」

上野介さも訝しげの顔色、

「是は以ての外怪しからぬ。内匠殿、お場處柄も辨へず、今日この老人を愚弄せらるゝか。」

餘りの案外に、内匠頭はつと驚きの面を揚ぐれば、其の面上に冷笑ひの聲を含みて浴せかけ、

「此の上野を愚弄するでなく、若し眞實この場合に差迫つて、左程のことも御存じないとすれば、上を欺いて今回の大役を申受けられたも同然、指圖も指南も事に依りけり。五萬三千石の大名、それで御用がつとまるものと思はるゝか。疎忽千萬。」

五萬三千石の大名

正保二年七月
淺野長直赤穂
五萬三千五百
石に封ぜられ
元祿十四年其
の子長矩の時
封除かる。

さらぬも堪へ難き連日の遺恨に、夜の目も合はず無念の涙を呑み、只さへ忍び難き鬱憤に、頬は瘦せ顔は蒼ざめながら、重ねくの恥辱も御奉公大切の一念に、元來の癩癬短氣を抑へ來りし今又五萬三千石の祿盜人と、言はぬばかりに辱められし内匠頭、その儘伏して座を動かねど、びたりと支へし兩手は我を忘れて拳を握り、頭を垂れし烏帽子は次第に打震ひ、鷹の羽の大紋は袖に漣を寄するが如し。さもこそと心地よげに座を起ちし上野介。

將軍
徳川綱吉。
桂昌院
家光の中臈、
本庄宗正の
女。

折しも將軍家の生母たる桂昌院の御使番として、大奥より急ぎ足に來りし梶川與三兵衛、かくとは知らず内匠頭に向つて御用の打合せ。

「これは幸ひ淺野殿、上様御勅答の御儀式相濟みましたる節は、其の旨此の梶川まで知らせ下されまするやう。」
松の御廊下を三四間の彼方まで走りし上野介、俄に振返りて立戻りぬ。

「梶川殿、何の御用かは存ぜぬが、桂昌院様よりとあれば、上野承らう。そこに居られる内匠殿では、作法萬端一向お分りにならぬ御人、心元ない。ありや近頃若毫碌せられたげぢや。」

伏したる内匠頭、むくりと起き上るや否、大原實盛＊の小さ刀を抜く手も見せず、電光石火の勢、帛を裂くが如き癩癬の一聲、「おのれッ。」躍りかゝつて上野の面上眞、二つと打込みし

大原實盛
古刀の鍛工、
年代住處不詳

が、餘りの悲憤に氣は焦りて拳は伸びたり。恨みの切先は流れて、がちりと烏帽子の鐵輪。「無念」と踏みこんで、仆れし上を二の太刀に斫下げし後より、梶川與三兵衛むづと羽搔攻に組付きぬ。

「お場處柄で御座るぞ、亂心々々。」内匠頭遁げゆく敵に血眼を注いで、さながら五臟六腑を絞り出す聲。

「ら、ら、亂心致さぬ。武士の御情、お慈悲、お慈悲ッ。」如何に荒狂うて振放さんとするも、如何に藻搔いて追はんとするも、梶川與三兵衛は八萬騎中に聞えたる六尺有餘の大力無雙。哀れ、内匠頭は元來の瘦形に、連日連夜の疲れ果てし身。みすく眼前に長蛇は逸せり。殿中は鼎の沸く

が如く、上を下への大騒動。

間一髪、吉良上野介は危き命を拾うて、馳付けし品川豊後守に助けられ、お坊主の肩に掛けられて、高家衆の詰所へ連れこまれしが、日比の權威傲慢に似合はず、息も絶えよくなる老眼に血を浴びて連れゆかるゝ時、「お典醫々々々」と聲を顫はしながら夢中に唸りし體、餘りの見苦しさと小氣味よさとに、出逢ひし諸侯何れも微笑を含みぬ。

武運の末、後より梶川與三兵衛の大力に抱きとめられ、前より坊主の關久和に太刀の手を搦まれて、斯くまでの鬱憤も無念も萬事こゝに休せし内匠頭、其の儘御目付の天野傳四郎と曾根五郎兵衛とに護られ、蘇鐵の間に引かれて、杉戸の

名家
藝州廣島藩主
淺野家を指す。

高濱虚子

名は清、俳人

潮來

茨城縣行方郡
の南端霞が浦
に濱す。

鹿島神宮

茨城縣鹿島町
大字宮中、官
幣大社、祭神
武甕槌神。

佐原

千葉縣香取郡
の都會、利根
川岸、成田の
東八里。

後に据ゑられしが、靜かに鬢の毛を撫上げ衣紋を繕ひし體、
「流石に名家の生れなり」とて、見るもの思はず涙を催しぬ。

(元祿四十七主)

一五 螢の王國 高濱 虚子

潮來に泊つた翌日、私は鹿島神宮に參詣して、その神社の裏
の高天が原と稱へられてゐる所を通り抜けて、一望際涯の
ない太平洋を展望してから、又引返して鹿島から船に乗つ
て、元の水道を後返りして佐原に行つたのであつた。今こ
こに書かうとするのは、其の佐原に着くまでの船中の所見
である。

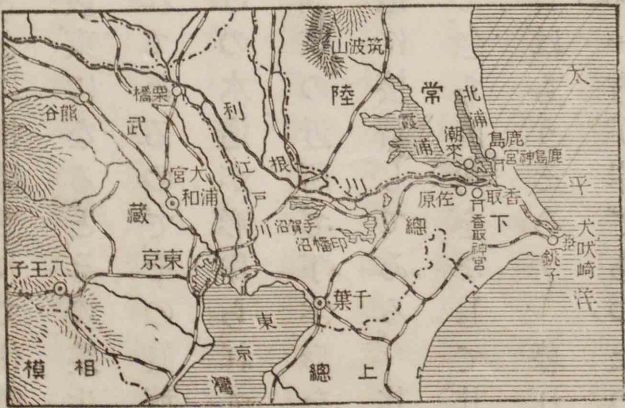
霞が浦

東西七里、南
北六里三三町
周圍三四里一
七町。

眞菰の中に

潮來出島の眞
菰の中に眞蒲
咲くとはしほ
らしや。

霞が浦といへば既に靜かな柔かい感じに打たれる。殊に
水郷としての潮來の如きは、眞菰の
中に眞蒲が咲くといふ俗語の聯想
からして、如何にも柔か味に満ちた
感じがする。實際其の境に遊んで
みても、此の心持は少しも裏切られ
ない。鹿島神宮に參詣して、其の裏
の大深林を突破したり、海岸から砂
丘まで十數丁もあらうかと思はれ
る様な、太平洋の沿岸に立つた時の
感とは、全く調子を異にして居るが、一たび霞が浦の水に近



づいて、その繪のやうな光景に接すると、我等の心は忽ち溶ける様な柔か味と、眠るやうな静かさとに抱擁されて仕舞ふ。霞が浦の廣々とした水も、潮來以東になると、その叢生して居る眞菰に大方の水面は隠されてゐるので、その眞菰と岸との間に、僅かに舟が通ずるだけの水道が形作られてゐるのである。そして其の水道は潮來の近所で丁字形をなして、其處から佐原に行く別の水道に接續してゐる。其の日私の乗つてゐた舟が其處に來て、忽ち直角をなして其の佐原に行く水道に入つた頃から、日はもうそろそろ暮れかけたのであつたが、見ると今まで片一方が岸であつたのと違つて、今度は兩方とも眞菰であつて、私の舟は正しく眞

菰の中を航行しつゝあつたのである。尤も處々には川岸らしく柳なども生えてゐたし、其の他の雜木なども薄暗がりに見えた。霞が浦は一面の水ではあるが、その水の中が更に深く堀り下げられて、舟が航行するに便宜な程の水深になつてゐて、其の他は眞菰の叢生に任せてある處もあるし、又既に埋立てられて、そこに樹木が生えたり田地が作られたりしてゐる所もある。何にせよ、だんくんと暮色が深くなつて來るので、はつきりした光景は解らなかつたが、ただ川蒸氣の機械の音の外は、殆ど何の音もない静かな眞菰の中の闇に坐つた様な心持で、私は四角な小さい船室の窓に顎を凭せて、移り行く外面の光景を臙氣ながら眺めてゐ

た。
不圖私の眼の前に特異な一つの世界が現はれて來た。それは螢の世界であつた。私の船が此の佐原行の水道に入つてから、既に螢の光には屢接してゐるので、少々の螢が眞菰に光つたり水の上を飛んだりするのは、何の珍しい景色でもなかつたが、此の時私の眼前に表はれた螢の世界といふのは、そんな普通なものではなかつた。それは正しく一本の柳の木が、水上に長い枝を垂れて居る所であつたがその柳の水に接してゐる所に、何萬匹、何十萬匹とも數知れぬ螢が、萩に置いた露よりも繁く、美しい光を放つてゐたことであつた。私の殊に驚いたのは、其の螢の世界の、如何に力

に満ちた動的な世界であつたかといふことで、其の何萬匹といひ何十萬匹といふ螢は、一匹として靜止してゐるものはなく、其の光は悉く動きつゝあつた。柳の絲を這ひ上るのもあれば、這ひ下るのもある。小さく飛ぶのもあれば大きく飛ぶのもある。恰も蚊柱が餅を搗いてゐる様に、それ等の螢は悉く柳の枝を中心にして嬉遊してゐる。それが又中心ほど動きが小さくつて、外部になる程動きが大きく、一番外面にある螢のごときは、數間の高さに飛上り飛下り、縦横無盡に闇を縫つて驅けるのであつた。又其の柳の枝は横に廣いよりも奥深く、其の光の中心は、其の深い奥の所に存在してゐて、そこに此の螢の王國の宮殿はあるや

うに思はれた。其の上又其の柳の下は、すぐ鏡の様な静かな水になつてゐるので、其の落花紛々たる螢の世界は、其の儘を水に映して、そこには二重に光の世界が描き出されるのであつた。そこで大空に數間高く飛ぶ螢は、又水中に向つて數間低く飛ぶことになり、水に接して露をこぼした様に散る螢は、又水の中から反對に水面めがけて同じ様な光を浮び上げて來るやうになるので、其の光景は一層美事なものとして人の眼に映るのであつた。さうしてこれに似寄つた光景は、船の進むに従つて幾度となく私の眼に表はれて來た。私はやはり船室に頸を載せた儘でそれを眺めたのであつたが、併し心は驚喜して、夢中に覺える心の興奮

の様な一種の興奮状態にあつた。日が暮れてから水吹きかけた螢籠の螢も、やはり同じ様に喜び飛び光るのではあるが、併し其の數を何千萬倍し、而も其の天地は自然其のままの自由な柔かい此の水郷の一部に置かれ、盡くるなき水、盡くるなき闇、盡くるなき力の中に、喜び飛び光る螢の王國は、此の時初めて私の眼に映じ出されたのであつた。(十五代將軍)

一六 七株松 その一

落合直文

七株松とは己が故郷の家の庭前に父君の植ゑ給へる松なり。植ゑ給ひしは明治十五年の冬、霜雪降りこぼる時なり。その折一封の書を寄せ給へり。其の中に、「汝等兄弟

落合直文
國文學者。(二
五二一—二五
六三)
父君
仙臺藩士鮎貝
盛房。

どもの齡を祝ひて七株松を植ゑたり。此の松の變らぬが如く、よく霜雪を堪へて學の道を勵み勤めよ」とあり。他の



伊達家
仙臺藩主伊達氏を指す。

筆頭にて、維新前は藩中にても尊敬せられたる家なり。祖父の君理財の道に長じ給ひしかば、家産も他の家には劣らず。父君その後を継ぎ給ひしが、夙に主家の爲に東奔西走

兄弟は知らず、己は深く肝に銘じて、一日と雖もそれを忘

直れず。我が家は伊達家の

門閥、しかも一家の

旗巻
福島縣相馬郡にある峠。維新の際仙臺藩兵の官軍を防ぎて激戦せる處。

氣仙沼
宮城縣本吉郡にある町。

多くは家におはせず。維新の際兵に將として、旗巻などに激しき戦をし給ひし事は、藩人のよく知る所なり。その後幽閉せられ給ひたるのみならず、家祿をさへ減ぜられしかば、家政の衰微いふばかりなし。仙臺を距る三十里、一の仙郷あり。氣仙沼といふ。そのわたりはすべて舊領地なりしかば、遂に一家を纏めてそこに退隱せられたり。館のある所は、氣仙沼より半里許りも南なる松岩といふ所なり。後に山を負ひ前に海を控へ、雲は庭に下りて自然の籬をなし、波は軒に寄せ來て又自然の池をなせり。かゝる所にしあれば俗塵たえて至らず。只聞ゆるは舊臣どもの父君を慰めむとて、朝夕歌ふ謠の聲のみ。

己が兄弟は七人なり。上には姉と兄と各一人、下には弟三人と妹一人とあり。姉一人は家に育ちしかど、他は皆里子となりて人の手にて育ちたり。父君はさまで心にもとめ給はざりしかど、母君は如何にしてこの數多の兄弟を教育せんかと、常に案じ煩ひ給ひたりとか。

明治四年の春ばかり、己と次の弟とを携へて仙臺に上り、それぞれ學校に寄宿せしめ給へり。一人手を離るれば一人里より歸るなど、母君は暫しも心を慰め給ふ折なし。その後姉は他に嫁ぎ、己は落合家に養はれ、一人の弟は壹岐家をつぎ、妹は飯田家の養女となれり。家に残れるは、兄と次の弟と末の弟と三人なり。兄弟の多きは、兄弟そのものの爲

カセ
リ

にはいふべからざる幸福なれども、親の身にとりては、それより心盡しなるものはなからむ。七株松は七人の兄弟に因みて植ゑ給へるものなり。その松は七株とも一處に生ひたれど、我々兄弟は未だ嘗て一堂の下に會したる事なし。己松岩にありし頃は、弟と妹とは里に在り。己仙臺にありし頃は、兄と姉とは松岩にあり。兄來る時は弟去り、妹去る時は姉來るなど、或は二人、或は三人、おほき時も四人より多かりし事なかりしなり。特に己は早くより都に上りしかば、兄弟團欒といふ快樂を得ること最も少かりしなり。同じく十一年、次の弟都に上れり。他郷にて兄弟にあひしはこれを始とす。あくる年、その次の弟又上れり。それよ

り二年を経て、妹また上れり。されど其の折は次の弟家に歸りてあらず。十五年、次の弟上れり。その折はその次の弟大阪に物してあらず。あくる年、はての弟上れり。「他郷にて四人會したるは珍し」など語りあふ。二十年、おのれ根岸に寓居せり。その年の五月その月三十日夜に入りて門を敲く者あり。誰ならむと出でて見るに、大阪に物したる弟なりけり。嬉しと思ひてむかへ入れたり。その弟、養家に急用ありて、明日拂曉こゝを出でたゝむの心なり」といふ。兄弟五人會せむことは生れて始めてなり。「明日は他の弟と妹とを招かむ程に、一日だけ出立を延しくれずや」と乞ふ。「養父の身にかゝりたる一大事、とてもさることならず」と云

根岸
東京市下谷區

ふ。「他の弟妹に知らせて、そなたを出で立たせむには、後にて怨まれもやせむ。よし、これより使を遣らむ」とて、下谷の車坂神田の今川小路、本郷の森川の三方へ手をわけて人を走らす。その時は午後の十一時をすこし過ぐる頃なり。一時間許りありて、車坂の妹訪ひきぬ。又三十分許りありて、二人の弟前後に訪ひきぬ。五人一室に會したる其の夜の喜び何にか譬へむ。「維新後家政衰微、完全なる教育を受くる能はず」など一人がいへば、「兄弟の中にて最も苦學せるは吾なり」など一人がいふ。朝とくおきて栗拾ひたる事、夜遅くまでおきゐて風張りたる事、幼時より今日までの歴史、悉く談話に上りたる、あはれなり。はては父の恩、母の愛な

上野
東京市下谷區
舊寛永寺境内
明治六年公園
となる。約十
七萬坪あり。

はなつたあつ

ど細かに語り出で、父君には七株松を植ゑて、我等兄弟によそへ給へり。それほど我等を思ひ給へり。一日も早く七人の兄弟打寄りて、膝下に孝養なさまほしきに非ずや」といふ。時に時計午前四時を報ず。窓押上げて、五人共に上野の方を眺むるに、杉の梢のあたり不如歸と啼きたる杜鵑、あゝるは二聲、あるは三聲、その聲のいかに己等の腸をたちたらむ。今なほ記憶して忘れず。

弟は養家の用事すませて、舊里へも立歸らむとのことなりしかば、燈火影薄き所、四人齊しく筆執りて書を認む。長きあり、短きあり。其の長短は等しからねど、親を忍ぶ心に至りては變りもあらざるべくや。發車の時間も迫りたる由

にて、かの弟は出でたつ。己等四人上野停車場まで見送りぬ。「七株松はいかなる松にか。など、門を出づるより停車場に至るまで、只故郷の物語より外の物語なし。愛情と云ふものは、常に逢ふ者の爲には薄く、別れがちなる者の爲には切なるものなり。己等兄弟は常に離散、偶逢ふも又直ちに別るゝを例とせり。故に兄弟の愛情の切なる、蓋し世の人人には夢にも思ひ及ばざる所あらむ。特に五人相會したる、生れて始めてなり。さるを一夜にしてまた別れむとする。この曉の離情、己等兄弟の外には又語る能はず。

あくるとしの秋、父母の戀しさにたへず、妹を伴ひて歸省す。父君も母君も御心を、しくましくして、己等兄弟にむかひ

て、未だ嘗てめしき言葉などかけ給ひし事はなかりしを、
こたびは兩眼に涙を浮べさせ給へり。かくまで老いさせ
給へるかこころと心こころも心ならず。父君庭の松を指し給ひて、あれ
見よとのたまふ。例の七株松何れも立榮えて、その色いみ
じう青し。この七株松は己等に代りて、朝夕父母の心を慰
め奉れり。それを思へば、いつくしさ懐かしさ遣らむ方なし。
父君母君床につき給ひて後、家なる兄と己等二人とくさぐ
さの物語す。兄、父君も母君も年ごとに弱うならせ給へり。
父君は咳嗽頻に、母君は眼の疾起らせ給へり。なにかと心
を碎きたれど、今にその驗おはせず。いかにかならせ給ふ
らむ。心こころがこころりにこそこころなどいふ。それを聞きわたる己等二

人の悲しさはいかばかりならむ。朝夕膝下を離れず孝養
を盡す兄、その兄こそ羨しけれなど、怨むまじき事を怨むも、
又怨うらみのかぎりならむ。居ること一週間、明日は出で立たむ
と思ひて、その旨聞え申す。父君も母君も留め給はず。留
め給はぬは留め給ふよりも猶苦しき御心なめり。あくる
朝になりても何事も宣はず。宣はぬは宣ふよりも猶苦し
き御心なめり。愈立ちいづる時になりて、末の弟のことよ
きにたのむの一言、父君の御口より出でたり。己等兄弟そ
の性質一ならず。そのうち最もかはりたるは末の弟なり。
豪放疎暴たえて人のいふをきかず。仙臺に上りたるも、都
に上りたるも、父母の許を得ざるなり。父君かねて麗しき

屏風を造らせ給へり。畫工してそれに書かしめむと思ひ
 給ひしに、この弟竊に詩を書き散らしたり。又妹の養父新
 たに羽織を作りたるに、その裏の絹にも詩を書き散らした
 り。その性かくの如し。さるを出立に際して、父君の言の
 特に此の弟に及びしなど、其の惠のしげさ、實に七株松上の
 露にもまさりぬべし。

歸途仙臺に宿す。妹は幼き時姉に別れたるまゝ、一回も逢
 はざれば、こたびは如何にもして逢はむと、そのみ頼みに
 頼みたるに、姉は先つ日より、刈田なる青根温泉に物したる
 由にて在らず。其の失望の様いふべからず。姉と妹との
 愛情は、男の兄弟の中にていふ愛情の外に、又一種の愛とい

刈田宮城縣の郡名、青根温泉は柴田郡に屬すれども、刈田名を取二郡の郡境に近ければかくいへるなるべし。
 青根温泉宮城縣柴田郡刈田村、海抜二四〇尺、類泉。

ふもの一種の情といふものあるならむか。保春院といふ
 は代々の菩提寺なり。仙臺に在る舊臣二三名に案内せさ
 せて御墓詣す。仙臺には姉の住めば、折々掃除などせさす
 と見えて、思ひしよりは清らなり。さはいへ大いなる碑石
 は稍、苔を生じ、麗しき花立、珍しき水鉢、嚴しき香爐、そは昔の
 儘ながら、花もなければ水もなく、香の烟の如きは絶えて久
 しうなりたる様なり。「心は心として事足らず」とは、おのが
 家維新後の有様なり。その影響祖先の墓にまで及べるか
 と思へば、いとなげかはし。

こゝに二夜ねて、その次の日出てたゝむとせしに、姉の許へ
 はやいひ送れり。今日にも歸らむ。彼は逢ひたし」と常に

増田 宮城縣名取郡
三里 仙臺市の南約
三里 岩沼
同縣 同郡、仙
臺市の南四里
大河原 同縣柴田郡。

その事をのみ口にせり。さるを逢はせて歸さむには、その怨はいかに。」と家人どものいへば、猶一日を延しぬ。されど歸り來ず。こゝに妹を慰めてまた共に出てたつ。増田岩沼などの停車場を過ぎて、はや大河原の停車場に掛らむとする頃、彼方より笛の聲たてて汽車走りきぬ。頓てかの汽車と行違ふ。ふと目を注ぎしに、彼方の車に姉乗れり。「姉君」といひさま、手なる新聞打棄てて車窓より見送りぬ。姉亦同じ様に見返りぬ。その間僅かに一瞬、この一瞬の間に、おのが腦に浮びたる感情はいかに。おのが筆にしておのがこの時の感情を、精密微細にはた自由に書き現はす事を得むには、數千萬語を費すも猶、足らざらむ。さて妹はいかにと願れば、只茫然として物もいはず。かの姉なからむには、この妹なからむには、かくのみ物は思はざらむを。人はあらまほしと願ふ姉妹、おのれ亦嬉しと思ひし姉妹、今俄になからましかばと思ふも、悲しさの極遂に茲に到れるにや、我ながら判斷する能はず。

一七 七株松 その二

さて歸省せしその年の十二月その四日はいかなる凶日ぞや。一人より外にはあらぬ最愛の妹病死せり。七人の兄弟一堂に會せむと、寐てもさめても只その事のみを言合へりしに、彼は遂にその快樂を得る事叶はずなれり。彼を加

へて七人なり。彼がその快樂を得る事叶はずなれるは、やがて己等兄弟がその快樂を得る事叶はずなれるなり。この時のおのが心の中それいかにぞや。この秋歸省せし時、彼はいへり、「父君も母君もいたく老いさせ給へり。早く兄弟七人會して、御心を慰めまつるべき策をたて給はずや」と。己は答へたり、「それは二三年たちての後にこそ。學成らざるに業遂げざるに相會したりとて、父君・母君は喜ばせ給ふべきにあらず」と。今より思へば、その時彼が言葉に従ひたらむか、彼をしてかの快樂を得しめたらむを、己等兄弟もその快樂を得たらむを。あはれ、彼は逝けり。今後何を以て己等兄弟の快樂とはなさむ。

おのれ妹をつれて歸省せしかば、父母に對しては聊か慰むる術もあらむ。只姉に對して何とて言譯せむ。妹の死去を報ぜし書、大方おのれ書きたり。されど姉への書はかくこと能はず、そは人して書かしめたり。その返報はいかにと思ひわたりしに、四日許りありて届きたり。常は懐かしと思ひし姉の書、その日は封押開くもおそろしき心地せり。書の中に、「昨日・今日の大雪、かの七株松は雪折もやせむと思ひわたれるに、松にはあらで妹のたふれたりとは誠か。そなた此處に立寄りし時、何とて今一日彼をとめて我に逢はせざりしぞ。その怨は此の降る雪よりも猶深うなむ」とあり。己はそれに答ふる言葉をもたず。

淺草
東京市淺草區
淺草寺境内
明治六年公園
となる九萬
六千餘坪あり

その月の廿五日、妹の墓參の爲に淺草に赴き、夕つ方家に歸りしに、郷里より電報來てあり。取りて見るに、「父君病氣、疾く歸れ」の數語をかきしるせり。「こはいかに」と取敢へず、明日たつよきに頼むといふ返報を發したり。御病は何なるか、醫師は誰なるか、御食事はいかに、御熱度はいかになど雜念頻なり。その夜はいねざれば起くといふ事もせず。只夜のおくるのみ待ちわたれり。その心地實に一夜千秋ともいふべからむ。停車場に入るに、まだ早きこと一時三十分餘。「かく早く來ればとて、發車の時間のあるあり、愚なり」といふ人もあらむ。その愚は己もこゝにて感じたり。されど家を出づる時は、急ぐ心より外の心はあらざりしなり。

先年弟の歸りし時、四人打連れてこゝまで見送りしが、今日は己を見送るものとは一人もなし。見送らぬにあらず、見送るべき兄弟皆郷里に歸りて、今は一人も都にはあらぬなり、否、一人あり、淺草の寺にあり。されどそは死せる人、いかでか此處に送り來ることかなはむ。あはれ、彼にして此の世にあらむには、今日も連れだちて歸省すべきを、病み煩ひ給ふ父君にも逢はすべきを。何とて彼は老いたる父君よりも先立ちたらむ。はかなしや、かひなしやと、ひとり物思ふ折しも、上野山と淺草と二方より響く鐘の聲す。等しく鐘なるを、等しく聲なるを、淺草寺の鐘のかた特に身にしみて覺ゆるは、聲する方に彼の葬られてあればならむ。頓

宇都宮 栃木縣の首都 人口約三萬六千
 那須野が原 栃木縣那須郡中央の曠原
 白河 福島縣西白河郡の都會、河武隈川の右岸、人口約一萬八千
 命なりけり 年たけて又越ゆべしと思ひけり小夜の中山(西行法師)靜岡縣小笠原郡日坂の東なる坂嶺

て發車の時間となりしかば乗りこみぬ。おのが室には十
 二人の乗客あり。親子打連れたるもあれば、兄弟打連れた
 るもあり。その人々の喜ばしげなる様見ても、物思はしさ
 のみ優りてなむ。宇都宮もはや過ぎて、那須野が原にかゝ
 れるは十一時ごろなるべし。ゆきくゞて白河にかゝりぬ。
 この秋こゝを過ぎて都へ上りし時、妹、秋風に袂の露を拂は
 せていつ又越えむ白河の關とよめり。己そを見て、命なり
 けり小夜の中山といひたり。さるを彼の命は秋風に拂は
 るゝ露の如く、はや消えて跡もとめず。あはれ、その折年た
 けざるに、否、その年の中に、かく己一人又この關を越ゆべし
 とは思ひきや。おのがこの時の思ひ、語らむとすれど乗客

南湖 白河町の南十
八町、周圍一
里餘、松平樂
翁之を開鑿
す。
 松島 宮城縣宮城郡
松島灣中の列
島、日本三景
の一。
 鹿島臺 宮城縣志田郡
仙臺市の東北
五里。
 石越 宮城縣登米郡
佐沼の北一里
半。

は皆他人。立ちて車窓より眺むるに、南湖のわたり雁打連
 れて鳴き行くなど、哀と云ふも世の常にして。
 仙臺をもすぎたれど立寄らず。姉ははや出でたちたらむ
 と思へばなり。松島の停車場、鹿島臺の停車場、そこすぎて
 夜九時ばかり石越に着きぬ。こゝより車にて夜路を走ら
 す。狼河原に至れる頃、夜またくあけ放れぬ。こゝに舊臣
 五名出迎へたり。まづ、父君はと問ひしに、「一時は如何と案
 じまつりしが、少しは御心よき方なり」と聞く嬉しさに心は
 勇み、こゝよりさらに車を雇ひ、ともに打列ねて急ぎに急ぐ。
 午前十時辛うじて家に着きたり。門内、門外出で迎ふる人
 いと多し。

兄に誘はれて父君の臥床へと赴きぬ。母君を始め姉弟ども皆なみ居たり。少し離れて舊臣七八人さもらへり。直ちに御枕邊にすゝみて、今着きぬる旨を述べ。「よく來れり。我も稍、快くなれり」と宣ふ。姉は打萎れてありしが、頓て座をたちて奥の方さまへ行かれたり。妹のことおぼし出てならむと想像せしはあらずや。それより御容體など詳しく問ひまつりしに、「昨夜は舊臣どもに謠などを歌はせて聞きしが、その後は一入心地よきやうなれり。日ならず快復するならむ。まづ旅の装を解けよ」など宣ふ。姉再び出て來れり。されど妹のことは尋ねられず。父君への心遣なめりと思ひたれば、己もさる悲しきことはいひ出ださず。

さて七株松はいかにと庭前を見るに、なほ元のまゝにて一株も枯れず。

妹うせてより、おのれら兄弟は六人となれり。その六人皆集りたらむと思ひしに、末の弟一人見えぬ。いといぶかしと兄に問ひしに、「さればなり、彼は父君の御怒に觸れしことありて家出せしが、昨日朝歸り來て、父君に逢ひまつらむと乞ひまつりしかど、父君は更に許させ給はず」とのことなり。「かの弟の豪放、疎暴素より善からず。されど今猶許させ給はずとは、如何なる御心強さならむ。いで、おのれ詫び申さむ」と再び御枕邊に行きて、「彼の罪を許させ給へ」と乞ふ。父君の願なれど、此のことばかりは許しがたし」と宣ふ。父君き

こしめせ。父君が七株松もてなぞらへ給ひし兄弟七人、一堂に相會したることとは一回もはべらず。いつか膝下に打集ひて、共にその快樂を受けむものと互に契りかはししに、遂に其の一人なる妹はうせにたり。残れる六人偶、ここに集へるに、その中一人のみ相見たまはぬなど、そは又餘り御情なき事にははべらずや」と恨み聞えしに、しばしは御答もなかりしが、稍ありて、さらば彼もこゝにつれ來よ」と宣ふ。「許させ給ふか、そは嬉し」と起ちて彼の居る室に行き見るに、彼は端坐して何か思ふ所あるが如し。父君の仰の旨を語り聞かせしに、その喜び面に溢れたり。率て來りしに、父君は御眼をとちてましませり。「父君、父君、仰の儘に彼を

伴ひてはべり」といふに、眼を開きて彼の顔を見給ひしが、頓て又閉ぢ給ふ。その折落し給ひし涙に、かの豪放なる、かの疎暴なる弟も、いかにか感じたらむ、兩の袂を顔に押當てて、只俯き居たり。三日許りありて大晦の夜、兄弟六人打集り、舊臣中より旗卷の役に供せる者を呼びいて、當時の戦況などを語らす。床の間に飾れる甲冑、太刀などを指して、父君の奮戦し給ひし狀を述ぶるに、膝の進むも覺えず。かの失せにし妹は、父君の傳記をかく詳に聞きし事はなからむ。今夜この六人の外に彼のあらむには、その喜び今一入ならむ。何とて彼は失せしぞ。今夜は亡き人の魂魄の歸り來る夜なりとか。今己等六人この膝下に集れるを、彼は知る

やはた知らずや。

今年もはや今夜かぎりなり。都の事ども心に掛る事多かりしかば、明日出でたゝむと、其の旨父君に乞ひしに、「わが病は心遣ひすな。はや歸れ」と宣ふ。おのれ兄弟中最もおくれて來れり。さるに今又最も早く立去らむとす。他の兄弟に對して面目なしなど云ふことは、他人に對して起る心なり。己より先に來りし兄弟、己より後まで残らむ兄弟、その兄弟はおのが心には嫉ましようこそ。あくる日はやがて元日なり。朝とく起きて見るに、天氣麗かに、空には根かゝる雲もなし。愈、出でたゝむとするに、父君、「汝が首途の祝として、舊臣どもに謠をうたはせむ。しばし待て」とて、兄して

その用意せさせ給ふ。かくて父君も床の中に起きさせ給ひ、屠蘇の杯などとらす。杯一めぐり巡りしに、一人の老臣出でて、「何仕うまつらむ」といふ。父君、「親子のわかれなれば、夜討曾我七騎落などやよからむ」と宣ふ。おのれ、めでたき別にはべれば、七騎落の方願はし」といふ。謠ふもの三人、やがて笛・鼓・大鼓の聲起りぬ。父君病をつとめて立ちて舞ひたまふ。「契りほどなき早舟を、しばしとだにもいひあへず、跡を見送り佇めば、はや遠さかる浦の波、立ちわかれ行く有様を、の所は、哀とも覺えしが、嬉し泣きの涙は何か包まむ唐衣日も夕暮になりたれば、月の盃とり、にの所にいたり、喜ばしさに堪へず、己も、「心嬉しき酒宴かな」と歌ひ捨てて座

をたちぬ。坂を下りて門を出づれば、舊臣ども數多待ちゐたり。こゝに車に乗らむとて家の方を顧みするに、庭の七株松は何れも千年の色を現はせり。こはこれ已等兄弟の爲に植ゑ給ひしものなれど、その千年はさらに父君に捧げまつらむ。あはれ、父君のかぎりなき御齡はこの七株松ぞよく知らむ。
(萩の家遺稿)

一八 筑波まうて

大和田 建樹

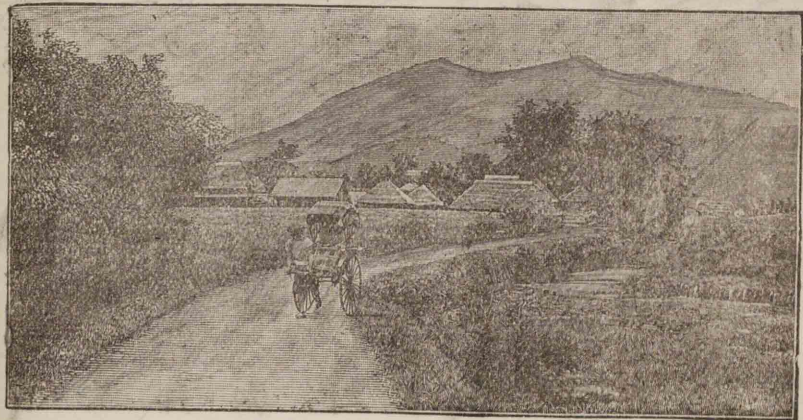
明くれば雨になりぬ。さりとして止むべきにもあらねば、濡るゝ覺悟にて朝飯を促し、箸とるゝ見渡すに、谷も山も霧こめて、雨いよゝゝしめやかなるに、軒近き桐の梢には、雀の

大和田建樹
文章家、舊字
和島藩士。二
七〇一七二五

彰仁親王
小松宮、邦家
親王の第五子
仁孝帝の養子
二五六三

飛びかふも見ゆ。行く道ならずば却りて興ある景色なるべきに。昨日の車夫に案内せさせて宿を出づ。雨やみたり。石段を登りて拜殿にぬかづく。入口には御神橋とて赤き欄干わたせる太鼓橋あり。雲に聳ゆる樓門あり。寶前の額は忝くも彰仁親王の御筆にて、神號の文字たふとく仰がる。櫻の紅葉のいと艶やかなるが、銀杏の黄なると相映じて立てる美しさよ。

左へ坂を登れば「男體山道」といふ石立てり。是より木の根、岩角に足を踏み止めつゝ、階子の如く急なる道を攀ち登る。時々こぼるゝ梢の露は雨よりも繁く、燃え立つ顔に降りかゝるもなかく憎からず。枝さしかはす松杉は、天を



蔽ひて晝もくらきに、立雜る木の
 葉の色、松明の光と見えて道照ら
 し顔なるも面白き山路なり。特
 に美しきは白膠木にて、楓は餘り
 筑多からず。何やらん山彦かへし
 波て呼び應ふる鳥、忘れたる様にて
 山折々鳴く。櫻塚と云ふに名木の
 櫻あり。藁葺のあづま屋には、濡
 れたる床几を殘せるのみにて、茶
 をすゝむる姫も居ず。見渡せば
 來し方の紅葉、松の木の間に染め

て花よりも美しく、谷水の聲かすかに響き出でたるは、繪師
 の筆にも寫し取らるべしやは。

薄からぬ色見せんとや村時雨

夜の間、に神のくだしそへけん

このあたり、楓やうく目につきたり。青葉の雜りて見ゆ
 るは、山廣くして神のたくみの未だ届かぬにやあらん。

筑波山たにのみぢば誰まちて

秋一しほのいろのこすらん

登りつめたる處を五軒茶屋と云ふ。平にして北の方打開
 けたり。まづ目の前に、波の如く魚の脊の如く、横たはり伏
 して眺めおろさるゝは、蘆穂山、其の右なるが我國山、其の左

筑波山
 茨城縣筑波郡
 眞壁・新治二
 郡にも跨る。二
 山頂は男體、
 女體二峰に分
 れる。海拔三、
 八〇尺。
 蘆穂山
 茨城縣眞壁郡
 あり。
 我國山
 同縣茨城郡に
 あり。

加波山茨城縣新治、眞壁兩郡境、海抜二六〇尺、自由黨一〇年の暴徒襲撃を以て當局者を狙撃せんとし、此の山に據る。
 眞壁茨城縣眞壁郡、筑波山北麓。
 眞岡栃木縣芳賀郡、宮の東南五里。
 櫻川茨城縣眞壁郡、東郡賀村の傍、兩岸皆櫻、論曲に堪能なる人、此の地なり、故に「懐しき音なり」と云へるなり。
 八溝山岩代常陸の國境四五里に遶する山脈。
 水戸浪士水戸藩士中、幕府に不満を抱ける士、藩を

なるが加波山なり」と車夫教ふ。「其のこなたなる一群の人家は眞壁、遠く霞めるあたりや木綿もて知られたる眞岡ならん。白くうねり行くこそ櫻川よ」と聞くにも懐かしき音ならず。雲を隔てて「へ」の字なりに見えたるは何處の山ぞ。「否、山にはあらず、雲ならん」と云ふもあれば「確かに山なり」と論じ返すもあり。道連ならぬ旅人さへ交りて、物語賑はしくなりぬ。茶店のあるじ呼出して判者に立つれば「あれこそ陸奥境の八溝山なれ。二十番の観音のある處よ」と云ふにて争は止みたり。判者言葉を繼ぎて曰く「此處は水戸浪士の籠りし時に切開かれたる跡にて、私どもが茶店を出だし、此の景色を御客様方にもてなし申すも浪士のお蔭なれ

藤田小四郎藤田小四郎は、東湖の四男、攘夷を敢行せんとし、幕府と戦ふ。捕はれて斬らる。年二十四。
 依雲亭藤田小四郎が此の處の茅屋に籠れる時、之に依雲亭と命名し、板木を刻して、茶屋に藏す。

ば、其の大將たりし藤田小四郎様の御筆を額にしつゝ、常に忘れず」とて、指さし示す方を見れば、依雲亭の文字は黒くふすぶりたる板に残りて、藁屋の軒に仰がれたり。歴史と云ひ字句と云ひ、げにもよしある名物とや云はまし。こゝより更に道をかへて、左の方に登らざるべからず。道いよゝゝ峻しく、紅葉いよゝゝ美し。最早染め残したる梢も見えず。花か錦か。黄なるさへ樺なるさへこきませたる、秋のわざこそたくみなれ。
 夜なゝに神や錦を急ぐらん
 つゆとしぐれを織姫にして
 喘ぎく嶺に上れば、風寒くして汗もいづくに行きつらん。

二柱の神
伊弉那岐神
伊弉那美神

土佐繪
平安朝の繪、
原基光の末藤
能の開きたる
史畫を以て顯
る。筑波町
茨城縣筑波郡
筑波山南方の
山腹、海拔三
三〇乃至八三
五尺の傾斜地
を占む。

千木高知る神の宮居は、南面してぞ立たせ給ふ。こゝより女體山を北に望めば、同じ千木造りの宮の雲透に見えて、呼ばば直ちに應へつべく、旅人もし我より先にあらば、蟻の形してや見出だされなん。あはれ、二柱の神代に返りて、天の浮橋を此の間に渡さましかば、廣前より下を望めば、切り立てたる如き岩の底には、松の緑のひまゝに、紅の梢をこきちらせる様、彩色よくせる土佐繪に打向ふ趣あり。若草に似たる松、躑躅に似たる紅葉、誰か此のあたりに隨身具したる物見車を書き忘れし。今朝出て來し筑波町遠く小さく見えて、愈、我が立つ巖の天に近きを覺えしむ。下りて木の間を潜り岩踏みしだきつゝ、立身石と云ふを見

に行く。十丈もあるらんと見えて、壁の如く立てる岩の面を垂れたる鎖傳ひつゝ、攀ち登るなり。仰ぎ見てさへ肝銷ゆる所を、いかでか、梯子にて屋根に上るにも足震はるゝ男が、二十貫目の身を犠牲にして足踏みかくべき。「止みなん」と云へば、「さらば裏口より」と云はるゝ儘に、後の方に廻れば、げにも岩根傳ひに行く道はつきたり。木を握り膝を突きつゝ、これもたやすくはあらねど、鎖の道ほどには如何でかあらん。岩の上より見下せば、腰をめぐる紅葉小さくして、仰ぎしよりも更に恐ろし。さるにても立身石見に來つる身の鎖を得登らざりし甲斐なさよ。五軒茶屋に歸りて預け置きたる傘外套など受取り、これよ

りは女體山さして右の方に入る。雲やうく晴れて日影たのもしく漏れ來れり。

もみぢ葉を片敷き伏して筑波山

神に一夜のやどやからまし

鶴鶴石、中岳の神社など拜み過ぎて、女體山の嶺に至る。社には宮守ゐて、御酒いたゞけと勧めたり。こゝも風寒くして震はるゝ許りなるに、神の惠の下露は、一脈の暖氣を腸に傳へぬ。後の巖に上れば眺望残る所なく、霞が浦を案内にして、近くは土浦より遠くは鹿島、銚子のあたりまで、霞みながらも見やられたり。刈りはてたる田つらには、おりぬる鳥さへ見ゆる心地して、豊けき秋の煙樂しげに満ちわたる

土浦

茨城縣新治郡

の都會、南は

櫻川、北は霞

が浦、人口約

一萬三千。

鹿島

茨城縣鹿島郡

の東端、人口

約二萬四千。

銚子

千葉縣海上郡

の都會、利根

川口、人口約

二萬六千。

こそ飽かぬさまなれ。さてもそなたの空に雲なかりせば、

富士の雪とも物言ひかはさるゝと聞きしを。此の山の麓

に續きて、松林に包まれ立てる一群の紅あり。車夫に問へ

ば、「白瀧なり」と云ふにぞ、歸りに廻らんは如何に」と云へば、「一

里半もあるべし」とて澁々なるを、強ひて勧めて下りに向ふ。

赤き欄干の橋ありて、天の浮橋と名づけたり。渡る折しも

飛びちる雲の戲にや、顔に時雨を打注ぎぬ。

引きあげし矛の雫の面影に

村雨わたるあまのうきはし

これより道又急にて、鎖の力を借る事も處々に在り。風神の窟、大黒岩、出舟、入舟石など云ふ類のもの見つゝ過ぎつゝ、

武藏坊
源義經
の臣、文治五
年、衣川に戦死
す。

安宅の關
石川縣能美郡
小松の西一里
關址は今海
中に陥りたり
と云ふ。

數多ある神社拜み廻りて、胎内くゞりを抜け、高天の原と云ふ岩のもとを経て、辨慶七戻と云ふに出づ。いかめしき岩の二つに割れたる上に、又一つの大岩かぶさりて屋根となりたる處を潜り行くなり。傳へ云ふ、武藏坊或時釣鐘を背負ひて、女體山に登らんとせしに、屋根なる岩搖ぎて落ちんとせしかば、七たびまで後しざりしつゝ、遂にえくゞらずして止みにきと。たゞ惜しむ、安宅の關にては機智を出しつる辨慶が、此の山にては上なる石をはねのくる智恵さへ力さへ出ださざりしを。行きくゞりて神の高嶺は雲薄くかゝりて、帷の中なる錦見る心地しつゝ、名殘は盡きせず。千木の影、紅葉の色、晝よりも

美しく、夢よりも幽かなり。

薄衣かけたる雲のたえまより

こぼれて見ゆる神のおもかけ

見返れば雲より上になりけり

わが分けきつる山のみぢ葉

白瀧のあたりは殊に木深くして、見上ぐる梢もみぢならぬはなし。其の間より晒せる布の色して落つる水、誰かは人界の物と見るべき。不動堂ありて瀧の水を笥に受け、幾筋も落させたるあたりには、人宿す家立並びて、二階造いと靜かなるが多けれど、見に来る人は夏を主とすれば、今は戸を閉ぢて人影もせず。たゞ我と車夫とのみ思ふ様に瀧を評

し紅葉を賞すれば、水また自然の聲して、秋とも冬とも知らず顔なる歌を歌ふ。歸さの道は山の麓を巡りて、直ちに筑波町に向ふ。観音堂の山茶花、薄紅に咲亂れて、岩の下潜る水更に浮世の外なり。(散文觀文深山櫻)

一九 足柄山の秘曲

熊田葦城

義光終に時秋を伴うて東に向ふ。美濃を過ぎ尾張を越え、參河・遠江を経て駿河に入り、伊豆の國府より路を東北に取りて進む。竹の下を過ぎて山路を辿ること若干丁、漸くにして足柄明神の前に抵る。義光轡を駐めて時秋を顧みつつ告ぐ。「此の先に關所ありて猥に人を通し候はず。我は

熊田葦城
名は宗次郎、
廣島縣福山市
の人、報知新
聞記者。
義光
源義家の弟。
時秋
義光の筈の師
豊原時元の子。

固より覺悟の身、關を破りても過ぎ候はん。和殿まで斯かる罪を犯し給はんは由なきわざにこそ。いざ、此處より引還し給ふべし。」懇ろに説き諭せども、時秋尙も聞入れず。「近江にてすら還り候はざりしものを、争でか此處より引還す心の候べき。唯々何時までも具し給ふべし。」飽くまでも共に陸奥に下らんと欲す。義光始めて心づく。時秋日頃我を師とも父とも敬ふとは云へ、斯かる長途に伴ひて我を慰めんこと、如何さま仔細あることぞ。重ねて時秋に向ひて語る。「和殿の胸中今こそ知りて候へ。さほど切なる望を懷きながら、色にも言葉にも出だし給はざりしこそ痛はしけれ。いざ、坐し給へ。」義光ひらりと馬より飛び下れ

父
豊原時元。

ば、從者楯二枚を芝生の上に敷く。義光その上に坐すれば、時秋も亦これに對して坐す。げにや、時秋の身には一つの望あり。幼にして父に別れ、年長じて父の業を學ぶ。日夜心を勵まして業を學べば、其の技いたく進みて、今は亡き父にも劣らず。家寶の笙譜傳へて左に兵衛尉殿の許に在り。折もあらば承け傳へて家道を全うせばやと、常に義光の許に行き通ひて、親しく交ること數年。此の度義光の陸奥に向ふを知りてより固く思ひ極む。もしも永き別れともなりなば、我が家の業長く絶えならん。此の上は俱にかの地に下りて、傳授を受くるの外はあらじ。業のため藝のためには、路の遠きをも厭はず、身の危

左兵衛尉
源義光。

きをも忘れて、斯くは遙々具し來れるなり。

義光徐かに時秋に向ひて告ぐ。「天食タイシキ入調ニツテウの二曲は、和殿の父より義光に傳へ給へるもの、義光亦固より和殿に傳へ候はん。奥州へ下りてよりは、兵馬忙しくして却つて其の暇なかるべし。いざ、此處にて傳へ候はん。」箆シヤウの中より取出て授くる秘曲の譜。時秋恭しく押戴き、天に歡び地に喜ぶ。「笛フエや候。」問はれて、時秋、これにこそ候へ。懷を探りて取出すは傳家の笙。折柄彌生フタツキの空淡く霞みて、弓張の月朧に影を宿す。義光やをら笙を把る。十指軽く排すれば、參差の聲長く短く嶺を度る。山靈出でて聽きぬべし。一曲清く奏すれば、娑娑の影高く低く天に翫る。仙鶴來つて舞

ひぬらん。時秋心耳を澄してしみとと聴く。感極りて
涙ぼたりくと膝に落つ。
此の夜は此處に留りて通宵奥義を談ず。談漸く盡くれば
天漸く明く。「此の上は最早奥に下るの要もあらじ。此處
より京都へ還り候へ。」義光暇を與ふれば、時秋いたく打驚
く。「こは思ひも寄らぬ仰かな。某の望こそかなひて候へ。
君の御恩は未だ報い奉らず。唯何處までも命を限とこそ
存じ候へ。何條この儘立ち歸り候べき。」はらくと涙を
垂れつゝ搔口説く。義光も亦目をしばだゝく。「和殿の志
は悦ばしうこそ候へ。さりながら我奥に下るからは、生き
て還らん心なし。兩人俱に果てなば、誰か此の道を傳へ候

ものぞ。和殿の父の我に傳へ給へるも、此の道を失はざら
んがためにして、我の今和殿につたへ候も、此の曲を斷たざ
らんが爲にこそ候へ。和殿若し死して此の曲長く絶えな
んか、亡父の本意にも戻り、義光が微衷もあだとなり候はん。
斯の道を學ばんばかりに此處まで下りしと申さば、朝廷に
も其の志を殊勝とこそ御覽ずれ。いかでか御答の候べき
や。軍の方には和殿なくとも事は缺かじ。斯の道には和
殿なくば誰かは繼がん。我に従はんは私の情なり。藝を
守らんは公の道なり。吳々も義光の言葉に従うて、此處よ
り御歸り候へ。」時秋聞くより涙瀧の如し。「さても情なき
ことを仰せ給ふものかな。君なくば争でか此の曲を學ば

れ候べき。厚恩の師を見棄てて歸らんこと、道の爲とは云へ、得こそ致すまじけれ。

彼方に道を思へば、此方には義を思ふ。並み居る従士聞いてみな涙を垂る。義光なほも懇ろに説きさとすこと再三。時秋いまは是非に及ばず、泣くく別れを告げて西に還る。足柄の山高く月清し。其の人滅ぶと雖も、其の名とこしなへに滅せず。(日本史蹟)

二〇 労働の朝

島崎藤村

朝はふたゝび茲に在り
埋れよねむり行けよ夢

朝はわれらと共にあり
かくれよさらば小夜嵐

島崎藤村
名は春樹、
野縣の人、
體詩小説を
くす(二五三
二一)

諸羽うち振るには鳥は
けふの命のたゝかひの
野に出でよ野に出でよ
草鞋とく結へ鎌もとれ
雲にむちうつ空の日は
ひとを勵ます其の音は
流るゝ汗とあぶらとの
名もなきしづの武士を
野に出でよ野に出でよ
草鞋とく結へ鎌もとれ

喉のふえをふき鳴らし
装ひせよとさけぶかな
稲の穂は黄に實りたり
風にいなゝく馬もやれ
語らず言はず聲なきも
野山に谷にあふれたり
落つるや何處かの野邊に
きたりて守れいくさ神
稲の穂は黄に實りたり
風にいなゝく馬もやれ

(藤村詩集)

尊氏

足利尊氏(一
九六五—二〇
一八)

直義

尊氏の同母弟
(一八九二—
二〇二八)

護良親王

大塔宮、後醍
醐天皇の第三
子(一九六八
—一九九五)

二階堂の谷

神奈川縣鎌倉
町の大字、在
柄の東北の山

天皇
後醍醐天皇。

二一 土の窟

大和田 建樹

尊氏の弟直義は護良親王を預りたてまつりしかば、嚴しく警固して鎌倉へ下したてまつり、二階堂の谷に土牢を造つて入れ參らせたり。親王は、南の方と云ふ女房より外には附添ひたてまつる人もなく、晝尙暗き土窟の中にぞ半年あまりを送らせ給ふ。天皇一旦の逆鱗に強き御言葉も出されたれど、御血を分け給ひし皇子なるものを、いかで斯ばかり酷き御扱せよとは御沙汰あるべき。ひとへに直義の宿意によるのみ。げに其の肉を寸斷せまほしきは、尊氏・直義の兄弟なりけり。

建武

後醍醐帝の年
號(一九九四
—一九九五)

相模次郎時

北條高時の第
二子、建武二
年鎌倉を攻め

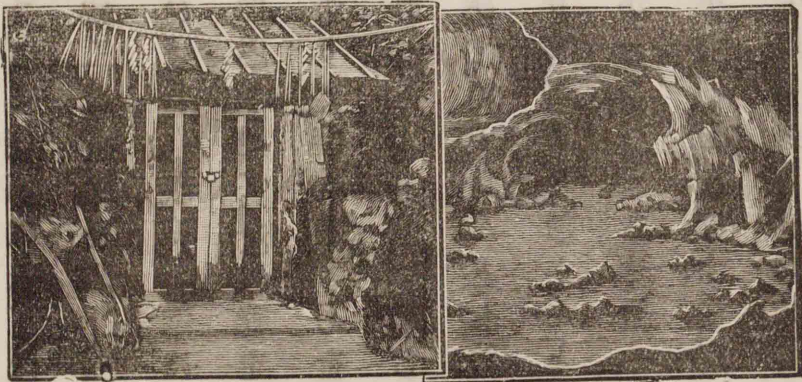
て直義を走ら
せ、南朝に歸

順せしが、延
元八年尊氏に

斬らる。(一
三)

山内
鎌倉の山北一
帯を稱せる名

淵邊義博
直義の臣下。



土の窟の入口と内部

建武二年、相模次郎時行兵を起して鎌倉を攻む。直義出でて奔り、既に山内に來りし時、急に淵邊義博を顧みて曰く、味方無勢にて一旦引退くといへども、やがて關西の兵を催して時行を滅さんこといと易し。たゞ後日の爲に恐るべきは、土牢におはします宮なり。汝これより馳返つて宮を失ひ奉れ」と。虎か狼か、何ぞ直義が人面にして獸心なる此の如き。

さても義博は急ぎたち返つて、御窟屋の前にまゐりたるに、親王は影細き燈を挑げさせ給ひて、餘念もなく讀經し居給ひけり。義博、御迎に参りて候と云ふく、下り入るに、親王振返り見て、汝は我を殺さんとの使ならんと、急に走りかかりて義博が太刀を奪はんとし給ふを、大力の義博太刀取直し、したゝかに撃ち奉る。親王はうつぶしに打倒され給ひて、起上らんとし給ふ所を、義博御胸の上に乗るかゝり奉りて、御首を搔かんとす。親王御首を縮めて刀の鋒先をしかとくはへさせ給へば、鋒先一寸ばかり折れにけり。義博その刀を投げすて、直ちに脇差を抜きて御胸のあたりを刺し奉り、少し弱らせ給ふ所を更に一刀刺し奉り、遂に御首か

き落しぬ。無慙と云ふも愚かなり。

義博は御首を持ちて窟屋の外へ走り出で、明るき處にて能く見奉るに、先に折れたる刀の鋒先御口の中に残り居て、御血色さながら生きてる人の如く、千萬無量の恨を含んで義博を睨み給へる様に見えしかば、餘りの恐ろしさに側なる叢の中に投棄してぞ立去りける。南の方は後にて其の御首を見出でて拾ひ上げ、厚く葬り奉り、やがて黒髪おろして永く御跡を弔ひ奉りけりとぞ。

(日本歴史譚大塔宮)

二二 苦境

幸田露伴

よろづのもの苦境を経ざるは絶えてなし。

幸田露伴
名は成行、文學博士、小説文章を能くす
(二五二七)

智慧拔群ならば苦を排し樂を得べしと思ふは、思ふこと淺きなり。智ある人には智ある人の苦ある事たとへば碁の道に深く造れる人もまた一勝一敗す、其の敗るゝ時は苦慮を免れざるが如し。勇力絶倫ならば苦を抜き樂を致すべしと思ふも、思ふこと至らざるなり。力ある人も心に任ずるのみにはあらぬこと、たとへば力士の優れたる者も又一生勝ち遂ぐるにはあらず、其の負くる日は苦戦を免れざるがごとし。富みて且貴く威ありて權ありとも、其の人常に樂地にありて苦境に居ることなかるべしと思ふは、甚しく誤れり。富者には富者の苦境あり。貴者には貴者の苦境あり。威權ある者には威權ある者の苦境あり。柱大な

れば梁も亦大にして、受くる力の少からざるが如し。南面の樂と云ふ語はあれど、帝王と雖も苦境なき能はず。明君英主は夜深くして寝ね、曉夙く起き、禮に徇ひて身を克し、義を取りて欲を捨て、夢にも國のため民の爲と、祈り求むるの意を遣れぬ様にし給ふものなり。天を樂しむと云ふ事もあれど、聖賢と雖も苦境なき能はず。古よりの聖賢の歎息、クサツ俳側の言多きをもて知るべし。まして豪傑俊異の士の如きは、魚の味の美なるものの釣られ、禽の肉の旨きものの羅せらるゝが如く、世の大任を負ひ邦の公益を圖らざるを得ざるより、樂地に居る事は少く、艱難困厄の間に一生を終るは、何時の代何れの國に於ても然り。凡常の人は實に苦境

と云ふべき程の苦境に立つことも無くて終る者なれども、
 材物小なれば堪ふる力も乏しきまかた、苦境に沈めりと思ひ惱
 むこと多し。とともてもかくても苦境の存することを免れぬ
 は人の世なり。語に曰く、苦中の苦を喫せずば、人上の人と
 なり難し。と。苦境をば味ふべきなり。苦境を避けて走ら
 んとはなすべからざるなり。 (洗心録)

大正國語副讀本 (教科用) 卷二終

大正八年三月十五日印
 大正八年三月二十日發
 大正八年八月十二日訂正再版印刷
 大正八年八月十五日訂正再版發行

大正國語副讀本全五册

定價	
卷一・二	各金參拾貳錢
自卷三至卷五	各金參拾錢
大正十年度臨時定價	
卷一・二	各金七拾錢
自卷三至卷五	各金六拾六錢

著作者

東京市麴町區土手三番町三十六番地

保科孝一

著作
所有

發行者

東京市牛込區白銀町廿九番地
右代表者 合資育英書院

目黑甚七

印刷者

東京市京橋區西紺屋町二十七番地

佐久間衡治

株式會社 秀英舍

發行所

東京市牛込區白銀町廿九番地
振替口座(東京)七四二番

合資育英書院

東京市京橋區南傳馬町二丁目
振替口座(東京)二八〇九番

目黑書店

